

蟹工船

小林多喜二

青空文庫

「おい地獄さ行くんだで！」

二人はデツキの手すりに寄りかかつて、かたつむり 蝸牛が背のびをしたように延びて、海をかか抱え込んでいるはこだて函館の街を見ていた。――漁夫は指元まで吸いつくしたたばこ煙草をつば唾と一緒に捨てた。巻煙草はおどけたように、色々にひっくりかえつて、高いサイド船腹をすれずに落ちて行つた。彼はからだ身体一杯酒臭かつた。

赤い太鼓腹をはば巾広く浮かばしている汽船や、積荷最中らしく海の中からかたそで片袖をグイと引張られてでもいるように、思いツ切り

片側に傾いているのや、黄色い、太い煙突、大きな鈴のようなヴイ、ナンキンむし南京虫のように船と船の間をせわしく縫っているランチ、寒々とざわめいている油煙やパン屑くずや腐った果物の浮いている何か特別な織物のような波……。風の工合で煙が波とすれずれになびいて、ムツとする石炭の匂いを送った。ウインチのガラガラという音が、時々波を伝って直接じかに響いてきた。

この蟹工船博光丸のすぐ手前に、ペンキの剥はげた帆船が、へさきの牛の鼻穴のようなどころから、いかり錨の鎖を下していた、甲板を、マドロス・パイプをくわえた外人が二人同じところを何度も機械人形のように、行ったり来たりしているのが見えた。ロシアの船らしかった。たしかに日本の「蟹工船」に対する監視船だった。

「俺おんらもう一文も無え。——糞くそ。こら」

そう云つて、身体をずらして寄りこした。そしてもう一人の漁夫の手を握つて、自分の腰のところへ持つて行つた。裨はんでん天の下のコールテンのズボンのポケットに押しあてた。何か小さい箱らしかった。

一人は黙つて、その漁夫の顔をみた。

「ヒヒヒヒ……」と笑つて、「花札はなよ」と云つた。

ボート・デツキで、「將軍」のような恰かっこう好をした船長が、ブラブラしながら煙草をのんでいる。はき出す煙が鼻先からすぐ急角度に折れて、ちぎれ飛んだ。底に木を打つた草履ぞうりをひきずつて、食物バケツをさげた船員が急がしく「おもて」の船室を出入した。

——用意はすっかり出来て、もう出るにいいばかりになっていた。
雑夫ざつぷのいるハツチを上から覗のぞきこむと、薄暗い船底の棚たなに、巢
から顔だけピヨピヨ出す鳥のように、騒ぎ廻っているのが見
えた。皆十四、五の少年ばかりだった。

「お前は何処どこだ」

「××町」みんな同じだった。函館の貧民窟くつの子供ばかりだった。
そういうのは、それだけで一かたまりをなしていた。

「あっちの棚は？」

「南部」

「それは？」

「秋田」

それ等は各 棚をちがえていた。

「秋田の何処だ」

濃うみのような鼻をたらした、眼のふちがあかべをしたようにただれているのが、

「北秋田だんし」と云った。

「百姓か？」

「そんだし」

空気がムンとして、何か果物でも腐ったすツぱい臭気がしていた。漬物を何十樽たるも蔵しまつてある室が、すぐ隣りだったので、「糞」のような臭いも交っていた。

「こんだ親父おど抱いて寝てやるど」——漁夫がベラベラ笑った。

薄暗い隅すみの方で、袴はんてん天を着、股ももひき引をはいた、風呂敷を三角にかぶった女でめん出面らしい母親が、林檎りんごの皮をむいて、棚に腹ばん這ばいになっている子供に食わしてやっていた。子供の食うのを見ながら、自分では剥むいたぐるぐるの輪になった皮を食っている。何かしやべったり、子供のそばの小さい風呂敷包みを何度も解いたり、直してやっていた。そういうのが七、八人もいた。誰も送つて来てくれるもののない内地から来た子供達は、時々そつちの方をぬすみ見るように、見ていた。

髪や身体がセメントの粉まみれになっている女が、キヤラメルの箱から二粒位ずつ、その附近の子供達に分けてやりながら、「うちの健吉と仲よく働いてやってくれよ、な」と云っていた。

木の根のように不恰好ぶかつこうに大きいザラザラした手だった。

子供に鼻をかねでやっているのや、手拭てぬぐいで顔をふいてやっているのや、ボソボソ何か云っているのや、あつた。

「お前さんどこの子供は、身体はええべものな」

母親同志だった。

「ん、まあ」

「俺どこのア、とても弱いんだ。どうすべかつて思うんだども、何んしろ……」

「それア何処でも、ね」

——二人の漁夫がハツチから甲板へ顔を出すと、ホツとした不機嫌ふきげんに、急にだまり合つたまま雑夫の穴より、もつと船首の、

梯形ていけいの自分達の「巢」に帰った。錨を上げたり、下したりする度に、コンクリート・ミキサの中に投げ込まれたように、皆は跳ね上り、ぶつつかり合わなければならなかった。

薄暗い中で、漁夫は豚のようにゴロゴロしていた、それに豚小屋そっくりの、胸がすぐゲエと来そうな臭いにおがしていた。

「臭せえ、臭せえ」

「そよ、俺だちだもの。ええ加減、こつたら腐りかけた臭いでもすべよ」

赤い白うすのような頭をした漁夫が、一升瓶びんそのまま、酒を端のかけた茶碗ちやわんに注いで、鰯するめをムシヤムシヤやりながら飲んでいた。その横に仰向けにひっくり返って、林檎を食いながら、表紙のボ

ロボロした講談雑誌を見ているのがいた。

四人輪になつて飲んでいたのに、まだ飲み足りなかつた一人が割り込んで行つた。

「……んだべよ。四カ月も海の上だ。もう、これんかやれねべと思つて……」

頑^{がんじょう}丈な身体をしたのが、そう云つて、厚い下唇を時々癖のように嘗^なめながら眼を細めた。

「んで、財布これさ」

干柿のようなべつたりした薄い^{がまぐち}墓口を眼の高さに振つてみせた。

「あの白首^{ごけ}、身体こつたらに小せえくせに、とても上手^{うめ}えがった

どオ！」

「おい、止せ、止せ！」

「ええ、ええ、やれやれ」

相手はへへへへと笑った。

「見れ、ほら、感心なもんだ。ん？」酔った眼を丁度向い側の棚の下にすえて、顎あごで、「ん！」と一人が云った。

漁夫がその女房に金を渡しているところだった。

「見れ、見れ、なア！」

小さい箱の上に、皺しわくちやになった札や銀貨を並べて、二人でそれを数えていた。男は小さい手帖てちように鉛筆をなめ、なめ何か書いていた。

「見れ。ん！」

「俺にだつてかかあ嬬や子供はいるんだで」白首ごけのことを話した漁夫が急に怒つたように云つた。

そこから少し離れた棚に、宿ふつかよい酔の青ぶくれにムクンだ顔をした、頭の前だけを長くした若い漁夫が、

「俺アもう今度こそア船さ来ねえツて思つてたんだけどもな」と大声で云つていた。「周旋屋に引つ張り廻されて、文無しになつてよ。——又、長げえことくたばるめに合わされるんだ」

こつちに背を見せている同じ処から来ているらしい男が、それに何かヒソヒソ云つていた。

ハツチの降口に始め鎌かまあし足を見せて、ゴロゴロする大きな昔風

の信玄袋を担になつた男が、梯子はしごを下りてきた。床に立つてキヨロキヨロ見廻わしていたが、空あいているのを見付けると、棚に上つて来た。

「今日は」と云つて、横の男に頭を下げた。顔が何かで染つたように、油じみて、黒かつた。「仲間えさ入れて貰えます」

後で分つたことだが、この男は、船へ来るすぐ前まで夕張炭坑に七年も坑夫をしていた。それがこの前のガス爆発で、危く死そこに損そこねてから——前に何度かあつた事だが——フイと坑夫が恐ろしくなり、鉾山やまを下りてしまった。爆発のとき、彼は同じ坑内にトロツコを押して働いていた。トロツコに一杯石炭を積んで、他の人の受持場まで押して行つた時だつた。彼は百のマグネシウムを

瞬間眼の前でたかれたと思つた。それと、そして1/500秒もちがわず、自分の身体が紙ツ片きれのように何処かへ飛び上つたと思つた。何台というトロツコがガスの圧力で、眼の前を空のマッチ箱よりも軽くフツ飛んで行つた。それツ切り分らなかつた。どの位経たつたか、自分のうなつた声で眼が開いた。監督や工夫が爆発が他へ及ばないように、坑道に壁を作つていた。彼はその時壁の後から、助ければ助けることの出来る炭坑夫の、一度聞いたら心に縫い込まれでもするように、決して忘れることの出来ない、救いを求める声を「ハツキリ」聞いた。——彼は急に立ち上ると、気が狂つたように、

「駄目だ、駄目だ！」と皆の中に飛びこんで、叫びだした。（彼

は前の時は、自分でその壁を作ったことがあった。そのときは何んでもなかつたのだつたが)

「馬鹿野郎！　ここさ火でも移つてみる、大損だ」

だが、だんだん声の低くなつて行くのが分るではないか！　彼は何を思つたのか、手を振つたり、わめいたりして、無茶苦茶に坑道を走り出した。何度ものめつたり、坑木に額を打ちつけた。全身ドロと血まみれになつた。途中、トロツコの枕木につまずいて、ともえな巴投げにでもされたように、レールの上にたたきつけられて、又氣を失つてしまった。

その事を聞いていた若い漁夫は、

「さあ、ここだつてそう大して変らないが……」と云つた。

彼は坑夫独特な、まばゆいような、黄色ツぼく艶つやのない眼差まなざしを漁夫の上にじつと置いて、黙っていた。

秋田、青森、岩手から来た「百姓の漁夫」のうちでは、大きく安坐あくらをかいて、両手をはすがいに股またに差しこんでムシツとしているのや、膝ひざを抱えこんで柱によりかかりながら、無心に皆が酒を飲んでいゝるのや、勝手にしやべり合っているのに聞き入っているのがある。——朝暗いうちから畑に出て、それで食えないで、追払われてくる者達だった。長男一人を残して——それでもまだ食えなかつた——女は工場の女工に、次男も三男も何処かへ出て働かなければならない。鍋なべで豆をえるように、余つた人間はドシドシ土地からハネ飛ばされて、市に流れて出てきた。彼等はみんな

「金を残して」内地くにに帰ることを考えている。然し働しかいてきて、一度陸を踏む、するとモチを踏みつけた小鳥のように、函館や小樽でバタバタやる。そうすれば、まるツきり簡単に「生れた時」とちつとも変らない赤裸くわくになって、おっぽり出された。内地くにへ帰れなくなる。彼等は、身寄りのない雪の北海道で「越年おっねん」するために、自分の身体を手鼻位の値で「売らなければならぬ」——彼等はそれを何度繰りかえしても、出来の悪い子供のように、次の年には又平気で（？）同じことをやってのけた。

菓子折を背負った沖売の女や、薬屋、それに日用品を持った商人が入ってきた。真中の離島のように区切られている所に、それぞれの品物を広げた。皆は四方の棚の上下の寢床から身体を乗り

出して、ひやかしたり、笑談じょうだんを云った。

「お菓子がしめえか、ええ、ねっちやよ？」

「あッ、もツちよこい！」沖売おきりの女が頓とんきよう狂きやうな声を出して、ハネ上った。「人の尻しりさ手ばやったりして、いけすかない、この男！」

菓子で口をモグモグさせていた男が、皆の視線が自分に集ったことにテレテ、ゲラゲラ笑った。

「この女子あねこ、可愛いめんこな」

便所から、片側の壁に片手をつきながら、危い足取りで帰ってきた酔払いが、通りすがりに、赤黒くプクンとしている女の頬ほっぺたをつつついた。

「何んだね」

「怒んなよ。——この女子あねこば抱いて寝てやるべよ」

そう云つて、女におどけた恰好をした。皆が笑つた。

「おい 饅頭まんじゅう、饅頭！」

ずウと隅すみの方から誰か大声で叫んだ。

「ハアイ……」こんな処ではめずらしい女のよく通る澄んだ声で返事をした。「幾なんぼですか？」

「幾なんぼ？ 二つもあつたら不具かたわだべよ。——お饅頭、お饅頭！」

——急にワツと笑い声起つた。

「この前、竹田つて男が、あの沖売の女は無理矢理に誰もいねえどこさ引つ張り込んで行つたんだとよ。んだだけ、面白いんでない

か。何んぼ、どうやっても駄目だって云うんだ……」酔った若い男だった。「……猿さるまた又ははいてるんだとよ。竹田がいきなりそれを力一杯にさき取ってしまったんだとよ、まだ下にはいてるツて云うんでねか。——三枚もはいてたとよ……」男が頸くびを縮めて笑い出した。

その男は冬の間はゴム靴会社の職工だった。春になり仕事が無くなる、カムサツカへ出稼でかせぎに出た。どっちの仕事も「季節労働」なので、(北海道の仕事は殆ほとんどそれだった)イザ夜業となると、ブツ続けに続けられた。「もう三年も生きれたら有難い」と云っていた。粗製ゴムのような、死んだ色の膚をしていた。

漁夫の仲間には、北海道の奥地の開墾地や、鉄道敷設の土工部

屋へ「蛸たこ」に売られたことのあるものや、各地を食いつめた「渡り者」や、酒だけ飲めば何もかもなく、ただそれでいいものなどがいた。青森辺の善良な村長さんに選ばれてきた「何も知らない」。「木の根ツこのように」正直な百姓もその中に交っている。——そして、こういうてんでんばらばらのもの等を集めることが、雇うものにとつて、この上なく都合のいいことだった。（函館の労働組合は蟹工船、カムサツカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂いになっていた。青森、秋田の組合などとも連絡をとつて。——それを何より恐れていた）

糊のりのついた真白い、上衣うわぎの丈たけの短い服を着た給仕ボーイが、「とも」のサロンに、ビール、果物、洋酒のコップを持って、忙しく往き

来していた。サロンには、「会社のオツかない人、船長、監督、それにカムサツカで警備の任に当る駆逐艦の御大^{おんたい}、水上警察の署長さん、海員組合の折^{おり}鞆^{かばん}」がいた。

「畜生、ガブガブ飲むったら、ありやしない」——給仕はふくれかえっていた。

漁夫の「穴」に、浜なすのような電気がついた。煙草の煙や人いきれで、空気が濁って、臭く、穴全体がそのまま「糞^{くそ}壺^{つぼ}」だった。区切られた寢床にゴロゴロしている人間が、蛆^{うじ}虫^{むし}のようになうごめいて見えた。——漁業監督を先頭に、船長、工場代表、雑夫長がハツチを下りて入って来た。船長は先のハネ上っている髭^{ひげ}を気にして、始終ハンカチで上唇を撫^なでつけた。通路には、林

檣やバナナの皮、グジヨグジヨした高丈たかじょう、鞋わらじ、飯粒のこびりついてゐる薄皮などが捨ててあつた。流れの止つた泥溝どぶだつた。監督はじろりそれを見ながら、無遠慮に唾をはいた。——どれも

飲んで来たらしく、顔を赤くしていた。

「一寸ちよつと云つて置く」監督が土方の棒頭ぼうがしらのように頑丈がんじょうな

身体で、片足を寢床の仕切りの上にかけて、楊子ようじで口をモグモグさせながら、時々齒にはさまつたものを、トツトツと飛ばして、口を切つた。

「分つてるものもあるだろうが、云うまでもなくこの蟹工船の事業は、ただ単にだ、一会社の儲仕事もうけしごとと見るべきではなくて、實際上の一大問題なのだ。我々が——我々日本帝国人民が偉いか、

露助が偉いか。一騎打ちの戦いなんだ。それに若し、若しもだ。そんな事は絶対にあるべき筈はずがないが、負けるようなことがあつたら、鞆丸きんたまをブラ下げた日本男児は腹でも切つて、カムサツカの海の中にブチ落ちることだ。身体が小さくたつて、野呂間な露助に負けてたまるもんじやない。

「それに、我カムサツカの漁業は蟹罐詰ばかりでなく、鮭さけ、鱒ますと共に、国際的に云つてだ、他の国とは比らべもならない優秀な地位を保つており、又日本国内の行き詰つた人口問題、食糧問題に對して、重大な使命を持つているのだ。こんな事をしやべつたつて、お前等には分りもしないだろうが、ともかくだ、日本帝国の大きな使命のために、俺達は命を的に、北海の荒波をつツ切つて

行くのだということを知つて貰わにやならない。だからこそ、あつちへ行つても始終我帝国の軍艦が我々を守つていてくれることになつてゐるのだ。……それを今流行りはやの露助の真似まねをして、飛んでもないことをケシかけるものがあるとしたら、それこそ、取りも直さず日本帝国を売るものだ。こんな事は無い筈だが、よつく覚えておいて貰うことにする……」

監督は酔いぎめのくさめを何度もした。

酔払つた駆逐艦の御大はバネ仕掛の人形のようなギクシヤクした足取りで、待たしてあるランチに乗るために、タラップを下りて行つた。水兵が上と下から、カントン袋に入れた石ころみたい

な艦長を抱えて、殆んど持てあましてしまった。手を振ったり、足をふんばったり、勝手なことをわめく艦長のために、水兵は何度も真正面まともから自分の顔に「唾」を吹きかけられた。

「表じゃ、何んとか、かんとか偉いこと云つてこの態さまなんだ」
艦長をのせてしまつて、一人がタラップのおどり場からロープを外しながら、ちらつと艦長の方を見て、低い声で云つた。

「やっちまうか!!……」

二人は一寸息をのんだ、が……声を合せて笑い出した。

祝津しゆくつの燈台が、廻転する度にキラツキラツと光るのが、ずうと遠い右手に、一面灰色の海のような海霧ガスの中から見えた。それが他方へ廻転してゆくとき、何か神秘的に、長く、遠く白銀色の光茫こうぼうを何海渚かいりもサツと引いた。

留萌るもいの沖あたりから、細い、ジユクジユクした雨が降り出してきた。漁夫や雑夫は蟹の鋏はさみのようにかじかんだ手を時々はずがいに懐ふところの中につツこんだり、口のあたりを両手で円まるく囲んで、ハアと息をかけたりにして働かなければならなかった。——納豆の糸のような雨がしきりなしに、それと同じ色の不透明な海に降つた。が、稚内わかかないに近くなるに従つて、雨が粒々になつて来、広い海の面が旗でもなびくように、うねりが出て来て、そして又そ

れが細かく、せわしなくなつた。——風がマストに当たると不吉に鳴つた。鉦びょうがゆるみでもするようになり、ギイギイと船の何処かが、しきりなしにきしんだ。宗谷海峡に入った時は、三千噸トシに近いこの船が、しゃっくりにでも取りつかれたように、ギク、シヤクし出した。何か素晴らしい力でグイと持ち上げられる。船が一瞬間宙に浮かぶ。——が、ぐうと元の位置に沈む。エレヴエターで下りる瞬間の、小便がもれそうになる、くすぐったい不快さをその度たびに感じた。雑夫は黄色になえて、船酔らしく眼だけとんがらせて、ゲエ、ゲエしていた。

波のしぶきで曇つた円い舷窓げんそうから、ひよいひよいと樺太からふとの、雪のある山並の堅い線が見えた。然しかしすぐそれはガラスの外

へ、アルプスの氷山のようにモリモリとむくれ上ってくる波に隠されてしまう。寒々とした深い谷が出来る。それが見る見る近付いてくると、窓のところへドツと打ち当り、砕けて、ザア……と泡立つ。そして、そのまま後へ、後へ、窓をすべって、パノラマのように流れてゆく。船は時々子供がするように、身体を揺つた。棚からものが落ちる音や、ギ——イと何かたわむ音や、波に横ツ腹がドブ——ンと打ち当る音がした。——その間中、機関室からは機関の音が色々な器具を伝って、直接じかに少しの震動を伴ってドツ、ドツ、ドツ……と響いていた。時々波の背に乗ると、スクリユが空廻りをして、翼で水の表面をたたきつけた。

風は益々強くなってくるばかりだった。二本のマストは釣竿つりざお

のようにたわんで、ビュウビュウ泣き出した。波は丸太棒の上でも一またぎする位の無雑作で、船の片側から他の側へ暴力団のようにあばれ込んできて、流れ出て行つた。その瞬間、出口がザア―と滝になつた。

見る見るもり上つた山の、恐ろしく大きな斜面に玩おもちゃ具の船程に、ちよこんと横にのツかることがあつた。と、船はのめつたように、ドツ、ドツと、その谷底へ落ちこんでゆく。今にも、沈む！ が、谷底にはすぐ別な波がむくむくと起たち上つてきて、ドシンと船の横腹と体当りをする。

オホツツク海へ出ると、海の色がハッキリもつと灰色がかつて来た。着物の上からゾクゾクと寒さが刺し込んできて、雑夫は皆

唇をブシ色にして仕事をした。寒くなればなる程、塩のように乾いた、細かい雪がビユウ、ビユウ吹きつのはつてきた。それは硝子ガラスの細かいカケラのように甲板に這はいつくばつて働いている雑夫や漁夫の顔や手に突きさささつた。波が一波甲板を洗つて行つた後は、すぐ凍えて、デラデラに滑すべつた。皆はデツキからデツキヘロープを張り、それに各自がおしめのようにブラ下り、作業をしななければならなかつた。——監督は鮭殺しの棍こんぼう棒をもつて、大声で怒鳴り散らした。

同時に函館を出帆した他の蟹工船は、何時の間にか離れ離れになつてしまつていた。それでも思いつ切りアルプスの絶頂に乗り上つたとき、溺できししや死者が両手を振つているように、揺られに揺ら

れている二本のマストだけが遠くに見えることがあった。煙草の煙ほどの煙が、波とすれずれに吹きちぎられて、飛んでいた。：波浪と叫喚のなかから、確かにその船が鳴らしているらしい汽笛が、間を置いてヒユウ、ヒユウと聞えた。が、次の瞬間、こつちがアプ、アプでもするように、谷底に転落して行つた。

蟹工船には川崎船を八隻のせていた。船員も漁夫もそれを何千匹の鱧ふかのように、白い齒をむいてくる波にもぎ取られないように、縛りつけるために、自分等の命を「安々」と賭かけなければならなかつた。——「貴様等の一人、二人が何んだ。川崎一艘ぱい取られてみる、たまつたもんでないんだ」——監督は日本語でハツキリそういつた。

カムサツカの海は、よくも来やがった、と待ちかまえていたように見えた。ガツ、ガツに飢えている獅子ししのように、えどなみかかってきた。船はまるで兎うさぎより、もつと弱々しかった。空一面の吹雪は、風の工合で、白い大きな旗がなびくように見えた。夜近くなってきた。しかし時化しけは止みそうもなかった。

仕事が終わると、皆は「糞壺」の中へ順々に入り込んできた。手や足は大根のように冷えて、感覚なく身体についていた。皆は蚕のように、各の棚の中に入ってしまったと、誰も一口も口をきくものがいなかった。ゴロリ横になって、鉄の支柱につかまった。船は、背に食いついている虻あぶを追払う馬のように、身体をやケすすに振っている。漁夫はあてのない視線を白ペンキが黄色に煤すすけた天

井にやったり、殆んど海の中に入りツ切りになっている青黒い円窓にやったり……中には、呆けたようにキョトンと口を半開きにしているものもいた。誰も、何も考えていなかった。漠然とした不安な自覚が、皆を不機嫌にだまらせていた。

顔を仰向けにして、グイとウイスキーをラツパ飲みになっている。赤黄く濁った、にぶい電燈のなかでチラツと瓶の角が光ってみえた。——ガラ、ガラツと、ウイスキーの空瓶が二、三カ所に稲妻形に打ち当って、棚から通路に力一杯に投げ出された。皆は頭だけをその方に向けて、眼で瓶を追った。——隅の方で誰か怒った声を出した。時化にとぎれて、それが片言のように聞えた。

「日本を離れるんだど」円窓を肱で拭っている。

「糞壺」のストローヴはブスブスくすぶ燻つてばかりいた。鮭や鱒と間違われて、「冷蔵庫」へ投げ込まれたように、その中で「生きてゐる」人間はガタガタふる顫えていた。ズツクで覆おおつたハッチの上をザア、ザアと波がおおまた大股に乗り越して行つた。それが、その度に太鼓の内部みたいな「糞壺」の鉄壁に、物もの凄すごい反響を起した。時々漁夫の寝ているすぐ横が、グイと男の強い肩でつかれたように、ドシンとくる。——今では、船は、断末魔の鯨が、荒狂う波濤はとうの間に身体をのたうっている、そのままだった。

「飯だ！」まかない賄がドアーから身体の上半分をつき出して、口で両手を囲んで叫んだ。「時化てるから汁なし」

「何んだって？」

「腐れ塩引！」顔をひっこめた。

思い、思い身体を起した。飯を食うことには、皆は囚人のような執念さを持っていた。ガツガツだった。

塩引の皿を安坐をかけた股の間に置いて、湯気をふきながら、バラバラした熱い飯を頬ばると、舌の上でせわしく、あちこちへやった。「初めて」熱いものを鼻先にもってきたために、水^{みず}漬^{ばな}がしきりなしに下がって、ひよいと飯の中に落ちそうになった。

飯を食っていると、監督が入ってきた。

「いけホイドして、ガツガツまくらうな。仕事もろくに出来ない日に、飯^{たらふく}ば^く腹食われてたまるもんか」

ジロジロ棚の上下を見ながら、左肩だけを前の方へ揺^ゆつて出て

行つた。

「一体あいつにあんなことを云う権利があるのか——船酔と過
労で、ゲツソリやせた学生上りが、ブツブツ云つた。

「浅川ツたら蟹工の浅か、浅の蟹工かつてな」

「天皇陛下は雲の上にいるから、俺達にヤどうでもいいんだけど、
浅つてなれば、どっこいそうは行かないからな」

別な方から、

「ケチケチすんねえ、何んだ、飯の一杯、二杯！　なぐつてしま
え！」唇を尖とんがらした声だった。

「偉い偉い。そいつを浅の前で云えれば、なお偉い！」
皆は仕方なく、腹を立てたまま、笑つてしまった。

夜、余程過ぎてから、雨合羽を着た監督が、漁夫の寝ているところへ入ってきた。船の動揺を柵の枠わくにつかまつて支えさきながら、一々漁夫の間にカンテラを差しつけて歩いた。南瓜かぼちやのようにゴロゴロしている頭を、無遠慮にグイグイと向き直して、カンテラで照らしてみていた。フンづけられたって、目を覚ます筈がなかった。全部照し終ると、一寸立ち止まつて舌打ちをした。——どうしようか、そんな風だった。が、すぐ次の賄部屋の方へ歩き出した。末広な、青ツぽいカンテラの光が揺れる度に、ゴミゴミした柵の一部や、脛すねの長い防水ゴム靴や、支柱に懸けてあるドザや裨はん天てん、それに行きこうりなど的一部分がチラ、チラツと光つて、消えた。——足元に光が顫ふるえながら一瞬間溜たまる、と今度は賄のドア

―に幻燈のような円るい光の輪を写した。――次の朝になって、雑夫の一人が行衛ゆくえ不明になったことが知れた。

皆は前の日の「無茶な仕事」を思い、「あれじゃ、波に浚さらわれたんだ」と思った。イヤな気持がした。然し漁夫達が未明から追い廻わされたので、そのことではお互に話すことが出来なかつた。「こつたら冷しやツこい水さ、誰が好き好んで飛び込むって！ 隠れてやがるんだ。見付けたら、畜生、タタきのめしてやるから！」監督は棍棒を玩具のようにグルグル廻しながら、船の中を探して歩いた。

時化は頂上を過ぎてはいた。それでも、船が行先きにもり上つた波に突き入ると、「おもて」の甲板を、波は自分の敷居でもま

たぐように何んの雑作もなく、乗り越してきた。一昼夜の鬪争で、満身に痛手を負ったように、船は何処か跛びっこな音をたてて進んでいった。薄い煙のような雲が、手が届きそうな上を、マストに打ち当たりながら、急角度を切つて吹きとんで行つた。小寒い雨がまだ止んでいなかった。四囲にもりもりと波がムクレ上つてくると、海に射込む雨足がハッキリ見えた。それは原始林の中に迷いこんで、雨に会うのより、もつと不気味だつた。

麻のロープが鉄管でも握るように、バリ、バリに凍えている。学生上りが、すべる足下に気を配りながら、それにつかまつて、デッキを渡つてゆくと、タラップの段々を一つ置きに片足で跳躍して上つてきた給仕に会つた。

「チョツと」給仕が風の当らない角に引張つて行つた。「面白いことがあるんだよ」と云つて話してきかせた。

——今朝の二時頃だった。ボート・デツキの上まで波が躍り上つて、間を置いて、バジャバジャ、ザアツとそれが滝のように流れていた。夜の闇やみの中で、波が齒をムキ出すのが、時々青白く光つてみえた。時化のために皆寝ずにいた。その時だった。

船長室に無電係が周章あわててかけ込んできた。

「船長、大変です。S・O・Sです！」

「S・O・S? ——何船だ!？」

「秩父丸です。本船と並んで進んでいたんです」

「ボロ船だ、それア!」——浅川が雨合羽あまがっぱを着たまま、隅すみの方

の椅子に大きく股またを開いて、腰をかけていた。片方の靴の先だけを、小馬鹿にしたように、カタカタ動かしながら、笑った。「もつとも、どの船だって、ボロ船だな」

「一刻と云えないようです」

「うん、それア大変だ」

船長は、舵機室に上るために、急いで、身仕度みじたくもせず、ドアを開けようとした。然し、まだ開けないうちだった。いきなり、浅川が船長の右肩をつかんだ。

「余計な寄道させて、誰が命令したんだ」

誰が命令した？「船長」ではないか。——が、突嗟とつさのことで、

船長は棒ぼうぐい杭くいより、もつとキョトンとした。然し、すぐ彼は自分

の立場を取り戻した。

「船長としてだ」

「船長としてだア——ア!?」船長の前に立ちはだかった監督が、

尻上りの侮辱した調子で抑えつけた。おさ「おい、一体これア誰の船

だんだ。会社が備船チアタアしてるんだで、金を払って。ものを云える

のア会社代表の須田さんとこの俺だ。お前なんぞ、船長と云つて

りや大きな顔してるが、糞場の紙位えの価値ねうちもねえんだど。分つ

てるか。——あんなものにかかわってみろ、一週間もフイになる

んだ。冗談じゃない。一日でも遅れてみる！それに秩父丸には

勿もったい体ない程の保険がつけてあるんだ。ボロ船だ、沈んだら、か

えつて得するんだ」

給仕は「今」恐ろしい喧嘩が！　と思った。それが、それだけで済む筈がない。だが（！）船長は咽喉のどへ綿でもつめられたように、立ちすくんでいるではないか。給仕はこんな場合の船長をかつて一度だって見たことがなかった。船長の云ったことが通らない？　馬鹿、そんな事が！　だが、それが起っている。——給仕にはどうしても分らなかつた。

「人情味なんか柄でもなく持ち出して、国と国との大相撲がとれるか！」唇を思いツ切りゆがめて唾つばをはいた。

無電室では受信機が時々小さい、青白いスパアクル火花を出して、しきりなしになっていた。とにかく経過を見るために、皆は無電室に行った。

「ね、こんなに打っているんです。——だんだん早くなりますね」
係は自分の肩越しに覗き込んでいる船長や監督に説明した。——
皆は色々な器械のスウィッチやボタンの上を、係の指先があち、
こち器用にすべるのを、それに縫いつけられたように眼で追いな
がら、思わず肩と顎根あごねに力をこめて、じいとしていた。

船の動揺の度に、腫物はれもののように壁に取付けてある電燈が、明
るくなったり暗くなったりした。横腹に思いツ切り打ち当る波の
音や、絶えずならしている不吉な警笛が、風の工合で遠くなつた
り、すぐ頭の上に近くなつたり、鉄の扉とびらを隔てて聞えていた。

ジイ——、ジイ——イと、長く尾を引いて、スパアクルが散つ
た。と、そこで、ピタリと音がとまってしまった。それが、その

瞬間、皆の胸へドキリときた。係は周章あわてて、スイッチをひねったり、機械をせわしく動かしたりした。が、それツ切りだった。もう打って来ない。

係は身体をひねって、廻転椅子をぐるりとまわした。

「沈没です！……」

頭から受信器を外はずしながら、そして低い声で云った。「乗務員

四百二十五人。最後なり。救助される見込なし。S・O・S、S

・O・S、これが二、三度続いて、それで切れてしまいました」

それを聞くと、船長は頸とカラアの間に手をつツこんで、息苦しそうに頭をゆすつて、頸をのばすようにした。無意味な視線で、落着きなく四圍あたりを見廻わしてから、ドアの方へ身体を向けてし

まった。そして、ネクタイの結び目あたりを抑えた。——その船長は見ていられなかった。

………

学生上りは、「ウム、そうか！」と云った。その話にひきつけられていた。——然し暗い気持がして、海に眼をそらした。海はまだ大うねりにうねり返っていた。水平線が見る間に足の下になるかと、思うと、二、三分もしないうちに、谷から狭せばめられた空を仰ぐように、下へ引きずりこまれていた。

「本当に沈没したかな」ひとりごと 独言が出る。気になって仕方がなか

った。——同じように、ボロ船に乗っている自分達のことか頭にくる。

——蟹工船はどれもボロ船だった。労働者が北オホツクの海で死ぬことなどは、丸ビルにいる重役には、どうでもいい事だった。資本主義がきまりきった所だけの利潤では行き詰まり、金利が下がって、金がダブついてくると、「文字通り」どんな事でもするし、どんな所へでも、死物狂いで血路を求め出してくる。そこへもつてきて、船一艘でマンマと何拾万円が手に入る蟹工船、——彼等の夢中になるのは無理がない。

蟹工船は「工船」（工場船）であつて、「航船」ではない。だから航海法は適用されなかつた。二十年の間も繋ぎ^{つな}ツ放しになつて、沈没させることしかどうにもならないヨロヨロな「梅毒患者」のような船が、恥かしげもなく、上べだけの濃^{こいげし}化粧^{しょう}をほどこさ

れて、函館へ廻つてきた。白露戦争で、「名誉にも」ビツコにされ、魚のハラワタのように放つて置かれた病院船や運送船が、幽霊よりも影のうすい姿を現わした。——少し蒸気を強くすると、パイプが破れて、吹いた。露国の監視船に追われて、スピードをかけると、（そんな時は何度もあつた）船のどの部分もメリメリ鳴つて、今にもその一つ、一つがバラバラに解ほぐれそうだった。中風患者のように身体をふるわした。

然し、それでも全くかまわない。何故なぜなら、日本帝国のためどんなものでも立ち上るべき「秋」ときだったから。——それに、蟹工船は純然たる「工場」だった。然し工場法の適用もうけていない。それで、これ位都合のいい、勝手に出来るところはなかつた。

利口な重役はこの仕事を「日本帝国のため」と結びつけてしまった。嘘うそのような金が、そしてゴツソリ重役の懐ふところに入ってくる。

彼は然しそれをモット確實なものにするために「代議士」に出馬することを、自動車をドライブしながら考えている。——が、恐らく、それとカツキリ一分も違わない同じ時に、秩父丸の労働者が、何千哩マイルも離れた北の暗い海で、割れた硝子屑ガラスくずのように鋭い波と風に向つて、死の戦いを戦っているのだ！

……学生上りは「糞壺くそつぼ」の方へ、タラップを下りながら、考えていた。

「他人事ひとごとではないぞ」

「糞壺」の梯子はしごを下りると、すぐ突き当りに、誤字沢山で、

雑夫、宮口を発見せるものには、バット二つ、手拭一本を、賞与としてくれるべし。

浅川監督。

と、書いた紙が、糊代りに使った飯粒のボコボコを見せて、貼^はらさってあつた。

霧雨が何日も上らない。それでボカされたカムサツカの沿線が、
するすると八ツ目鰻うなぎのように延びて見えた。

沖合四湮かいらのところに、博光丸が錨いかりを下ろした。——三湮まで口
シアの領海なので、それ以内に入ることには出来ない「ことになっ
ていた」。

網さばきが終つて、何時いつからでも蟹漁が出来るように準備が出
来た。カムサツカの夜明けは二時頃なので、漁夫達はすっかり身
支度をし、股またまでのゴム靴をはいたまま、折箱の中に入って、ゴ

口寝をした。

周旋屋にだまされて、連れてこられた東京の学生上りは、こんな筈はずがなかった、とブツブツ云っていた。

「ひと独り寝だなんて、ウマイ事云いやがって！」

「ちげえねえ、独り寝さ。ゴ口寝だもの」

学生は十七、八人来ていた。六十円を前借りすることに決めて、汽車賃、宿料、毛布、布団ふとん、それに周旋料を取られて、結局船へ来たときには、一人七、八円の借金（！）になっていた。それが始めて分つたとき、貨幣かねだと思つて握っていたのが、枯葉であつたより、もつと彼等はキョトンとしてしまった。——始め、彼等は青鬼、赤鬼の中に取り巻かれた亡者のように、漁夫の中に一か

たまりに固かたまっていた。

函館はこだてを出帆してから、四日目ころから、毎日のボロボロな飯と何時も同じ汁のために、学生は皆身体の工合を悪くしてしまつた。寢床に入ってから、膝ひざを立てて、お互に脛すねを指で押していた。何度も繰りかえして、その度たびに引つこんだとか、引つこまないとか、彼等の気持は瞬間明るくなつたり、暗くなつたりした。脛をなでてみると、弱い電気に触れるように、しびれるのが二、三人出てきた。棚たなの端から両足をブラ下げて、膝頭を手刀で打つて、足が飛び上るか、どうかを試した。それに悪いことには、「通じ」が四日も五日も無くなつていた。学生の一人が医者に通じ薬を貰いに行つた。帰つてきた学生は、興奮から青い顔をしていた。――

—「そんなぜいたくな薬なんて無いとよ」

「んだべ。船医なんてんなものよ」側そばで聞いていた古い漁夫が云つた。

「何処どこの医者も同じだよ。俺のいたところの会社の医者もんだつた」坑山の漁夫だつた。

皆がゴロゴロ横になつていたとき、監督が入つてきた。

「皆、寝たか——一寸ちよつと聞け。秩父丸が沈没したつていう無電が入つたんだ。生死の詳しいことは分らないそうだ」唇をゆがめて、唾つばをチエツとはいた。癖だつた。

学生は給仕からきいたことが、すぐ頭に来た。自分が現に手にかけて殺した四、五百人の労働者の生命のことを、平気な顔で云

う、海にタタキ込んでやっても足りない奴だ、と思った。皆はムクムクと頭をあげた。急に、ザワザワお互に話し出した。浅川はそれだけ云うと、左肩だけを前の方に振って、出て行った。

行衛ゆくえの分らなかつた雑夫が、二日前にボイラーの側から出てきたところをつかまつた。二日隠れていたけれども、腹が減つて、腹が減つて、どうにも出来ず、出て来たのだつた。捕つかんだのは中年過ぎの漁夫だつた。若い漁夫がその漁夫をなぐりつけると云つて、怒つた。

「うるさい奴だ、煙草のみでもないのに、煙草の味が分るか」バツトを二個手に入れた漁夫はうまそうに飲んでいた。

雑夫は監督にシャツ一枚にされると、二つあるうちの一つの方

の便所に押し込まれて、表から錠を下ろされた。初め、皆は便所へ行くのを嫌った。隣りで泣きわめく声が、とても聞いていられなかった。二日目にはその声がかすれて、ヒエ、ヒエしていた。そして、そのわめきが間を置くようになった。その日の終り頃に、仕事を終った漁夫が、氣掛りで直ぐす便所のところへ行つたが、もうドアを内側から叩たたきつける音もしていなかった。こつちから合図をしても、それが返つて来なかった。——その遅く、きんかく 辜隠しに片手をもたれかけて、便所紙の箱に頭を入れ、うつぶせに倒れていた宮口が、出されてきた。唇の色が青インキをつけたように、ハツキリ死んでいた。

朝は寒かった。明るくなつてはいたが、まだ三時だった。かじ

かんだ手を懐ふところにつっこみながら、背を円くして起き上つてきた。監督は雑夫や漁夫、水夫、火夫の室まで見廻つて歩いて、風邪かぜをひいているものも、病氣のものも、かまわず引きずり出した。

風は無かつたが、甲板で仕事をしていると、手と足の先きが挿す粉木りこぎのように感覚が無くなつた。雑夫長が大声で悪態をつきながら、十四、五人の雑夫を工場に追い込んでいた。彼の持つている竹の先きには皮がついていた。それは工場で怠なまけているものを機械わくごの枠越しに、向う側でもなぐりつけることが出来るように、造られていた。

「昨夜ゆうべ出されたきりで、ものも云えない宮口を今朝からどうしても働かさなけアならないって、さつき足で蹴けつてるんだよ」

学生上りになじんでいる弱々しい身体の雑夫が、雑夫長の顔を
見い、見いそのことを知らせた。

「どうしても動かないんで、とうとうあきらめたらしいんだけど」

其処そこへ、監督が身体をワクワクふるわせている雑夫を後からグ

イ、グイ突きながら、押して来た。寒い雨に濡ぬれながら仕事をさ

せられたために、その雑夫は風邪をひき、それから肋ろくまく膜を悪く

していた。寒くないときでも、始終身体をふるわしていた。子供

らしくない皺しわを眉まゆの間に刻んで、血の気のない薄い唇を妙にゆが

めて、疝かんのピリピリしているような眼差まなざしをしていた。彼が寒さ

に堪えられなくなつて、ボイラーの室にウロウロしていたところ

を、見付けられたのだった。

出漁のために、川崎船をウインチから降していた漁夫達は、その二人を何も云えず、見送っていた。四十位の漁夫は、見ていられないという風に、顔をそむけると、イヤイヤをするように頭をゆるく二、三度振った。

「風邪をひいてもらったり、不貞寝ふてねをされてもらったりするため、高い金払って連れて来たんじゃないんだぜ。——馬鹿野郎、余計なものを見なくたっていい！」

監督が甲板を棍こんぼう棒で叩いた。

「監獄だって、これより悪かったら、お目にかからないで！」

「こんなこと内地くにさ帰って、なんぼ話したって本当にしねんだ」

「んさ。——こつたら事って第一あるか」

ステイムでウインチがガラガラ廻わり出した。川崎船は身体を空にゆすりながら、一斉に降り始めた。水夫や火夫も狩り立てられて、甲板のすべる足元に気を配りながら、走り廻っていた。それ等のなかを、監督は鶏冠とさかを立てた牡鶏おんどりのように見廻った。

仕事の切れ目が出来たので、学生上りが一寸の間風を避けて、荷物のかけに腰を下していると、炭山やまから来た漁夫が口のまわりに両手を円く囲んで、ハア、ハア息をかけながら、ひよいと角を曲つてきた。

「えのぢまと生命的だな！」それが——心からファイと出た実感が思わず学生の胸を衝ついた。「やっぱし炭山と変らないで、死ぬ思**い**ばしないと、え生きられないなんてな。——瓦斯ガスも恐おツかねど、波もおつか

ねしな」

昼過ぎから、空の模様がどこか変つてきた。薄い海霧ガスが一面にかつた。波は風呂敷でもつまみ上げたように、無数に三角形に騒ぎ立つた。風が急にマストを鳴らして吹いて行つた。荷物にかけてあるズツクの覆おほいの裾すそがバタバタとデツキをたたいた。

「兎が飛ぶどオ——兎が！」誰か大声で叫んで、右舷のデツキを走つて行つた。その声が強い風にすぐちぎり取られて、意味のない叫び声のように聞こえた。

もう海一面、三角波の頂きが白いしぶきを飛ばして、無数の兎があたかも大平原を飛び上っているようだった。——それがカム

サツカの「突風」の前ブレだった。にわかには底潮の流れが早くなってくる。船が横に身体をずらし始めた。今まで右舷に見えていたカムサツカが、分らないうちに左舷になっていた。——船に居残って仕事をしていた漁夫や水夫は急に周章あわて出した。

すぐ頭の上で、警笛が鳴り出した。皆は立ち止ったまま、空を仰いだ。すぐ下にいるせいか、斜め後に突き出ている、思わない程太い、湯桶ゆおけのような煙突が、ユキユキと揺れていた。その煙突の腹の独逸帽ドイツのようなホイッスルから鳴る警笛が、荒れ狂っている暴風の中で、何か悲壮に聞えた。——遠く本船をはなれて、漁に出ている川崎船が絶え間なく鳴らされているこの警笛を頼りに、しけ時化をおかして帰って来るのだった。

薄暗い機関室への降り口で、漁夫と水夫が固り合つて騒いでいた。斜め上から、船の動揺の度に、チラチラ薄い光の束が洩れてもいた。興奮した漁夫の色々な顔が、瞬間々々、浮き出て、消えた。「どうした？」坑夫がその中に入り込んだ。

「浅川の野郎ば、なぐり殺すんだ！」殺気だつていた。

監督は実は今朝早く、本船から十哩ほど離れたところに碇とまつていた××丸から「突風」の警戒報を受取つていた。それには若もし川崎船が出ていたら、至急呼戻すようにさえ附け加えていた。その時、「こんな事に一々ビク、ビクしていたら、このカムサツカまでワザワザ来て仕事なんか出来るかい」——そう浅川の云つたことが、無線係から洩れた。

それを聞いた最初の漁夫は、無線係が浅川でもあるように、怒鳴りつけた。「人間の命を何んだって思つてやがるんだ！」

「人間の命？」

「そうよ」

「ところが、浅川はお前達をどだい人間だなんて思つていないよ」
何か云おうとした漁夫は吃つてしまった。彼は真赤になった。

そして皆のところへかけ込んできたのだった。

皆は暗い顔に、然し争われず底からジリ、ジリ来る興奮をうかべて、立ちつくしていた。父親が川崎船で出ている雑夫が、漁夫達の集っている輪の外をオドオドしていた。ステイが絶え間なしに鳴っていた。頭の上で鳴るそれを聞いていると、漁夫の心はギ

り、ギリと切り苛さいなまれた。

夕方近く、ブリτζから大きな叫声が起つた。下にいた者達はタラップの段を二つ置き位にかけ上つた。——川崎船が二隻近づいてきたのだつた。二隻はお互にロープを渡して結び合つていた。

それは間近に来ていた。然し大きな波は、川崎船と本船を、ガタンコの両端にのせたように、交互に激しく揺り上げたり、揺り下げたりした。次ぎ、次ぎと、二つの間に波の大きなうねりもり上つて、ローリングした。目の前にいて、中々近付かない。——歯がゆかつた。甲板からはロープが投げられた。が、とどかなかつた。それは無駄なしぶきを散らして、海へ落ちた。そしてロープは海蛇のように、たぐり寄せられた。それが何度もくり返さ

れた。こつちからは皆声をそろえて呼んだ。が、それには答えなかつた。漁夫達の顔の表情はマスクのように化石して、動かない。眼も何かを見た瞬間、そのまま硬こわばつたように動かない。——その情景は、漁夫達の胸を、眼まのあたり見ていられない凄すごさで、えぐり刻んだ。

又ロープが投げられた。始めゼンマイ形に——それから鰻うなぎのようにロープの先きがのびたかと思うと——その端が、それを捕えようと両手をあげている漁夫の首根を、横なぐりにたたきつけた。皆は「アッ！」と叫んだ。漁夫はいきなり、そのままの恰かつこう好で横倒しにされた。が、つかんだ！——ロープはギリギリとしまると、水のしたたりをしぼり落して、一直線に張った。こつちで

見ていた漁夫達は、思わず肩から力を抜いた。

ステイは絶え間なく、風の具合で、高くなったり、遠くなったり鳴っていた。夕方になるまでに二艘を残して、それでも全部帰ってくる事が出来た。どの漁夫も本船のデッキを踏むと、それつきり気を失いかけた。一艘は水船になってしまったために、いかり錨を投げ込んで、漁夫が別の川崎に移って、帰ってきた。他の一艘は漁夫共に全然行衛不明だった。

監督はブリブリしていた。何度も漁夫の部屋へ降りて来て、又上って行った。皆は焼き殺すような憎悪ぞうおに満ちた視線で、だまつて、その度に見送った。

翌日、川崎の搜索かたがた、かに蟹の後を追って、本船が移動する

ことになった。「人間の五、六匹何んでもないけれども、川崎が
いたまし」かつたからだつた。

朝早くから、機関部が急がしかつた。錨を上げる震動が、錨室
と背中合せになっている漁夫を煎^{いりまめ}豆のようにハネ飛ばした。サ
イドの鉄板がボロボロになつて、その度にこぼれ落ちた。——博
光丸は北緯五十一度五分の所まで、錨をなげてきた第一号川崎船
を搜索した。結氷の碎片^{かけら}が生きもののように、ゆるい波のうねり
の間々に、ひよいひよい身体^{からだ}を見せて流れていた。が、所々その
砕けた氷が見る限りの大きな集団をなして、あぶくを出しながら、
船を見る見るうちに真中に取囲んでしまふ、そんなことがあつた。

氷は湯気のような水蒸気をたてていた。と、扇風機にでも吹かれるように「寒気」が襲つてきた。船のあらゆる部分が急にカリツ、カリツと鳴り出すと、水に濡れていた甲板や手すりに、氷が張つてしまった。船腹は白粉おしろいでもふりかけたように、霜の結晶でキラキラに光つた。水夫や漁夫は両頬おきを抑えながら、甲板を走つた。船は後に長く、曠野こうやの一本道のような跡をのこして、つき進んだ。

川崎船は中々見つからない。

九時近い頃になつて、ブリτζジから、前方に川崎船が一艘浮かんでいるのを発見した。それが分ると、監督は「畜生、やつと分りやがったぞ。畜生！」デツキを走つて歩いて、喜んだ。すぐ発動機が降ろされた。が、それは探がしていた第一号ではなかった。

それよりは、もつと新しい第36号と番号の打たれてあるものだった。明らかに×××丸のものらしい鉄の浮標ヴァイがつけられていた。それで見ると×××丸が何処どこかへ移動する時に、元の位置を知るために、そうして置いて行ったものだった。

浅川は川崎船の胴体を指先きで、トントンたたいていた。

「これアどうしてバンとしたもんだ」ニヤツと笑った。「引いて行くんだ」

そして第36号川崎船はウインチで、博光丸のブリッジに引きあげられた。川崎は身体を空でゆすりながら、雫しずくをバジャバジャ甲板に落した。「ひと働きをしてきた」そんな大様な態度で、釣り上がって行く川崎を見ながら、監督が、

「大したもんだ。大したもんだ！」と、ひとりごと 独言した。

網さばきをやりながら、漁夫がそれを見ていた。「何んだ泥棒猫！ チエンでも切れて、野郎の頭さたたき落ちればえんだ」

監督は仕事をしている彼らの一人々々を、そこから何かえぐり出すような眼付きで、見下しながら、側を通って行った。そして大工をせつかちなドラ声で呼んだ。

すると、別な方のハツチの口から、大工が顔を出した。

「何んです」

見当外れはずをした監督は、振り返ると、怒りツぽく、「何んです？ ——馬鹿。番号をけずるんだ。カンナ、カンナ」

大工は分らない顔をした。

「あんぽんたん、来い！」

肩かたはば巾のこぎりの広い監督のあとから、鋸の柄を腰にさして、カンナを

持った小柄な大工が、びっこでも引いているような危い足取りで、甲板を渡って行つた。——川崎船の第36号の「3」がカンナでけずり落されて、「第六号川崎船」になつてしまつた。

「これでよし。これでよし。うツはア、様見さまやがれ！」監督は、口を三角形にゆがめると、背のびでもするように哄こうしやう笑しょうした。

これ以上北航しても、川崎船を発見する当がなかつた。第三十号川崎船の引上げで、足ぶみをしていた船は、元の位置に戻るために、ゆるく、大きくカーヴをし始めた。空は晴れ上つて、洗われた後のように澄んでいた。カムサツカの連峰が絵葉書で見る

スイツツルの山々のように、くつきりと輝いていた。

行衛不明になつた川崎船は帰らない。漁夫達は、そこだけが水溜りたまのようにポツンと空いた棚から、残して行つた彼等の荷物や、家族のいる住所をしらべたり、それぞれ万一の時に直ぐ処置が出来るように取り纏まとめた。——氣持のいいことではなかつた。それをしていると、漁夫達は、まるで自分の痛い何処かを、覗のぞきこまれているようなつらさを感じた。中積船が来たら托送たくそうしようと同じ苗字みょうじの女名前あてがその宛先あてになつている小包や手紙が、彼等の荷物の中から出てきた。そのうちの一人の荷物の中から、片仮名と平仮名の交つた、鉛筆をなめり、なめり書いた手紙が出た。

それが無骨な漁夫の手から、手へ渡されて行つた。彼等は豆粒でも拾うように、ボツリ、ボツリ、然しかしむさぼるように、それを読んでしまふと、嫌いやなものを見てしまったという風に頭をふつて、次ぎに渡してやつた。——子供からの手紙だつた。

ぐずりと鼻をならして、手紙から顔を上げると、カスカスした低い声で、「浅川のためだ。死んだと分つたら、弔い合戦をやるんだ」と云つた。その男は図体の大きい、北海道の奥地で色々なことをやってきたという男だつた。もつと低い声で、

「奴、一人位タタキ落せるべよ」若い、肩のもり上つた漁夫が云つた。

「あ、この手紙いけねえ。すつかり思い出してしまつた」

「なア」最初のが云つた。「うっかりしていれば、俺達だつて奴にやられたんだで。他人ひとごとでねえんだど」

隅すみの方で、立たて膝ひざをして、拇おや指ゆびの爪つめをかみながら、上眼をつかつて、皆の云うのを聞いていた男が、その時、うん、うんと頭をふつて、うなずいた。「万事、俺にまかせれ、その時ア！ あの野郎一人グイとやってしまうから」

皆はだまつた。——だまつたまま、然し、ホツとした。

博光丸が元の位置に帰つてから、三日して突然（！）その行衛不明になつた川崎船が、しかも元氣よく帰つてきた。

彼等は船長室から「糞壺」に帰つてくると、忽たちまち皆に、渦巻の

ように取巻かれてしまった。

——彼等は「大暴風雨」のために、一たまりもなく操縦の自由をなくしてしまった。そうなればもう襟えりくび首をつかまれた子供より他愛なかった。一番遠くに出ていたし、それに風の工合も丁度反対の方向だった。皆は死ぬことを覚悟した。漁夫は何時でも

「安々と」死ぬ覚悟をすることに「慣らされて」いた。

が（！）こんなことは滅多にあるものではない。次の朝、川崎船は半分水船になったまま、カムサツカの岸に打ち上げられていた。そして皆は近所のロシア人に救われたのだった。

そのロシア人の家族は四人暮しだった。女がいたり、子供がいたりする「家」というものに渴していた彼等にとって、其処そこは何

とも云えなく魅力だった。それに親切な人達ばかりで、色々進んで世話をしてくれた。然し、初め皆はやつぱり、分らない言葉を云つたり、髪の毛や眼の色の異ちがう外国人であるということが無気味だった。

何アんだ、俺達と同じ人間ではないか、ということが、然し直ぐ分らさった。

難破のことが知れると、村の人達が沢山集つてきた。そこは日本の漁場などがある所とは、余程離れていた。

彼等は其処に二日いて、身体を直し、そして帰つてきたのだつた。「帰つてきたくはなかつた」誰が、こんな地獄に帰りたいて！ が、彼等の話は、それだけで終つてはいない。「面白いこ

と」がその外にかくされていた。

丁度帰る日だった。彼等がストオヴの周りまわりで、身仕度をしながら話をしていると、ロシア人が四、五人入ってきた。——中に支那人が一人交っていた。——顔が巨おおきくて、赤い、短い鬚ひげの多い、少し猫背の男が、いきなり何か大声で手振りをして話し出した。船頭は、自分達がロシア語は分らないのだという事を知らせるために、眼の前で手を振って見せた。ロシア人が一句切り云うと、その口元を見ていた支那人は日本語をしゃべり出した。それは聞いている方の頭が、かえつてごじやごじやになってしまうような、順序の狂った日本語だった。言葉と言葉が酔払いのように、散り散りによろめいていた。

「貴方方、金キツト持っていない」
あなた

「そうだ」

「貴方方、貧乏人」

「そうだ」

「だから、貴方方、プロレタリア。——分る？」

「うん」

ロシア人が笑いながら、その辺を歩き出した。時々立ち止って、彼等の方を見た。

「金持、貴方方をこれする。（首を締めるかっこう 恰好かっこうをする）金持だんだん大きくなる。（腹のふくれる真似まね）貴方方どうしても駄目、貧乏人になる。——分る？——日本の国、駄目。働く人、これ

(顔をしかめて、病人のような恰好) 働かない人、これ。えへん、えへん。(偉張って歩いてみせる)「

それ等が若い漁夫には面白かった。「そうだ、そうだ!」と云つて、笑い出した。

「働く人、これ。働かない人、これ。(前のを繰り返して)そんなの駄目。——働く人、これ。(今度は逆に、胸を張って偉張つてみせる、)働かない人、これ。(年取つた乞食のような恰好)これ良ろし。——分かる? ロシアの国、この国。働く人ばかり。働く人ばかり、これ。(偉張る)ロシア、働かない人いない。ずるい人いない。人の首しめる人いない。——分る? ロシアちつとも恐ろしくない国。みんな、みんなウソばかり云つて歩く」

彼等は漠然と、これが「恐ろしい」「赤化」というものではないだろうか、と考えた。が、それが「赤化」なら、馬鹿に「当り前」のことであるような気が一方していた。然し何よりグイ、グイと引きつけられて行った。

「分る、本当、分る！」

ロシア人同志が二、三人ガヤガヤ何かしゃべり出した。支那人はそれ等をきいていた。それから又吃りどものように、日本の言葉を一つ、一つ拾いながら、話した。

「働かないで、お金儲もうける人いる。プロレタリア、いつでも、これ。（首をしめられる恰好）——これ、駄目！ プロレタリア、貴方方、一人、二人、三人……百人、千人、五万人、十万人、み

んな、みんな、これ（子供のお手々つないで、の真似をしてみせる）強くなる。大丈夫。（腕をたたいて）負けない、誰にも。分る？」

「ん、ん！」

「働かない人、にげる。（一散に逃げる恰好）大丈夫、本当。働く人、プロレタリア、偉張る。（堂々と歩いてみせる）プロレタリア、一番偉い。——プロレタリア居ない。みんな、パン無い。みんな死ぬ。——分る？」

「ん、ん！」

「日本、まだ、まだ駄目。働く人、これ。（腰をかがめて縮こまってみせる）働かない人、これ。（偉張って、相手をなぐり倒す

恰好) それ、みんな駄目！ 働く人、これ。(形相^{すじ}凄く立ち上る、突ツかかつて行く恰好。相手をなぐり倒し、フンづける真似) 働かない人、これ。(逃げる恰好) ——日本、働く人ばかり、いい国。——プロレタリアの国！ ——分る？」

「ん、ん、分る！」

ロシア人が奇声をあげて、ダンスの時のような足ぶみをした。

「日本、働く人、やる。(立ち上って、刃向う恰好) うれしい。ロシア、みんな嬉しい。バンザイ。——貴方方、船へかえる。貴方方の船、働かない人、これ。(偉張る) 貴方方、プロレタリア、これ、やる！ (拳闘のような真似) ——それからお手々つないでをやり、又突ツかかつて行く恰好) ——大丈夫、勝つ！ ——分る

「？」

「分る！」知らないうちに興奮していた若い漁夫が、いきなり支那人の手を握った。「やるよ、キットやるよ！」

船頭は、これが「赤化」だと思っていた。馬鹿に恐ろしいことをやらせるものだ。これで——この手で、露西亞が日本をマンマと騙す^{だま}んだ、と思った。

ロシア人達は終ると、何か叫声をあげて、彼等の手を力一杯握った。抱きついて、硬い毛の頬をすりつけたりした。面喰^{めんくら}った日本人は、首を後に硬直さして、どうしていいか分らなかつた。

……。

皆は、「糞壺」の入口に時々眼をやり、その話をもつともつと

うながした。彼等は、それから見てきたロシア人のことを色々話した。そのどれもが、吸取紙に吸われるように、皆の心に入りこんだ。

「おい、もう止せよ」

船頭は、皆が変にムキにその話に引き入れられているのを見て、一生懸命しゃべっている若い漁夫の肩を突ツついた。

四

靄もやが下りていた。何時も厳しく機械的に組合わさっている通風パイプ、煙チェムニー筒、ウインチの腕、吊り下がっている川崎船、デ

ツキの手すり、などが、薄ぼんやり輪廓をぼかして、今までにな
い親しみをもつて見えていた。柔かい、生ぬるい空気が、頬ほおを撫な
でて流れる。——こんな夜はめずらしかった。

トモのハッチに近く、蟹の脳味噌の匂いがムツとくる。網が山
のように積つまさつている間に、高さの跛びつこな二つの影が佇たたずんでいた。

過労から心臓を悪くして、身体が青黄く、ムクンでいる漁夫が、
ドキツ、ドキツとくる心臓の音でどうしても寝れず、甲板に上つ
てきた。手すりにもたれて、フ糊でも溶かしたようにトロツとし
ている海を、ぼんやり見ていた。この身体では監督に殺される。
然しかし、それにしては、この遠いカムサツカで、しかも陸も踏めず
に死ぬのは淋さびし過ぎる。——すぐ考え込まさつた。その時、網と

網の間に、誰かいるのに漁夫が気付いた。

蟹の甲殻かけらの片を時々ふむらしく、その音がした。

ひそめた声が聞こえてきた。

漁夫の眼が慣れてくると、それが分つてきた。十四、五の雑夫に漁夫が何か云っているのだった。何を話しているのかは分らなかつた。後向きになっている雑夫は、時々イヤ、イヤをしている子供のよう、すねているように、向きをかえていた。それにつれて、漁夫もその通り向きをかえた。それが少しの間続いた。漁夫は思わず（そんな風だった）高い声を出した。が、すぐ低く、早口に何か云った。と、いきなり雑夫を抱きすくめてしまった。喧嘩けんかだな、と思つた。着物で口を抑えられた「むふ、むふ……」

という息声だけが、一寸ちよつとの間聞えていた。然し、そのまま動かなくなつた。——その瞬間だつた。柔かい靄の中に、雑夫の二本の足がローソクのように浮かんだ。下半分が、すっかり裸になつてしまつてゐる。それから雑夫はそのまま蹲しゃがんだ。と、その上に、漁夫が墓がまのように覆おほいかぶさつた。それだけが「眼の前」で、短かい——グツと咽喉のどにつかえる瞬間に行われた。見ていた漁夫は、思わず眼をそらした。酔わされたような、撲なぐられたような興奮をワクワクと感じた。

漁夫達はだんだん内からむくれ上つてくる性慾に悩まされ出してきていた。四カ月も、五カ月も不自然に、この頑がんじよう丈しような男達が「女」から離はなされていた。——函館で買った女の話や、露骨な

女の陰部の話が、夜になると、きまつて出た。一枚の春画がボサボサに紙に毛が立つほど、何度も、何度もグルグル廻された。

………

床とれの、

こちら向けえの、

口すえの、

足をからめの、

気をやれの、

ホンに、つとめはつらいもの。

誰か歌った。すると、一度で、その歌が海綿にでも吸われるよ

うに、皆に覚えられてしまった。何かすると、すぐそれを歌い出した。そして歌ってしまつてから、「えッ、畜生！」と、ヤケに叫んだ、眼だけ光らせて。

漁夫達は寝てしまつてから、

「畜生、困つた！ どうしたつて眠れないや」と、身体をゴロゴロさせた。「駄目だ、俵が立つて！」

「どうしたら、ええんだ！」——終いに、しまそう云つて、ぼつき勃起して

いるきんたま辜丸を握りながら、裸で起き上つてきた。大きな身体の漁

夫の、そうするのを見ると、身体のしまる、何か凄せい惨さんな気さえ

した。度胆どぎもを抜かれた学生は、眼だけで隅すみの方から、それを見て

いた。

夢精をするのが何人もいた。誰もいない時、たまらなくなつて自洗をするものもいた。——たな棚の隅にカタのついた汚れた猿又やふんどし褌が、しめつぽく、すえた臭いにおをして円めまるられていた。学生はそれを野糞のように踏みつけることがあつた。

——それから、雑夫の方へ「夜よ這い」が始まつた。バツトをキヤラメルに換えて、ポケットに二つ三つ入れると、ハツチを出て行つた。

便所臭い、つけものだる漬物樽の積まざつてゐる物置を、コックが開けると、薄暗い、ムツとする中から、いきなり横ツ面でもなぐられるように、怒鳴られた。

「閉めろツ！ 今、入つてくると、この野郎、タタキ殺すぞ！」

×

×

×

無電係が、他船の交換している無電を聞いて、その収獲を一々監督に知らせた。それで見ると、本船がどうしても負けているらしい事が分つてきた。監督がアセリ出した。すると、テキ面にそのことが何倍かの強さになつて、漁夫や雑夫に打ち当つてきた。

——何時いつでも、そして、何んでもドン詰りの引受所が「彼等」だけだった。監督や雑夫長はわざと「船員」と「漁夫、雑夫」との間、仕事の上で競争させるように仕組んだ。

同じ蟹かにつぶしをしていながら、「船員に負けた」となると、（自分の儲けもうになる仕事でもないのに）漁夫や雑夫は「何に糞ツ

！」という気になる。監督は「手を打って」喜んだ。今日勝った、今日負けた、今度こそ負けるもんか——血の滲にじむような日が滅茶苦茶に続く。同じ日のうちに、今までより五、六割も殖ふえていた。然し五日、六日になると、両方とも気抜けしたように、仕事の高がズシ、ズシ減って行つた。仕事をしながら、時々ガクリと頭を前に落した。監督はものも云わないで、なぐりつけた。不意を喰くらつて、彼等は自分でも思いがけない悲鳴を「キャツ！」とあげた。——皆は敵同志かたぎか、言葉を忘れてしまった人のように、お互にだまりこくつて働いた。ものを云うだけのぜいたくな「余分」さえ残っていないかつた。

監督は然し、今度は、勝つた組に「賞品」を出すことを始めた。

燻^{くすぶ}りかえっていた木が、又燃え出した。

「他愛のないものさ」監督は、船長室で、船長を相手にビールを飲んでいた。

船長は肥えた女のように、手の甲にえくぼが出ていた。器用にきんぐち金口をトントンとテーブルにたたいて、分らない笑顔^{えがお}で答えた。

——船長は、監督が何時でも自分の眼の前で、マヤマヤ邪魔をしているようで、たまらなく不快だった。漁夫達がワツと事を起して、此奴をカムサツカの海へたたき落すようなことでもないかな、そんな事を考えていた。

監督は「賞品」の外に、逆に、一番働きの少いものに「焼き」を入れることを貼^{はり}紙^{がみ}した。鉄棒を真赤に焼いて、身体にそのま

ま当てることだった。彼等は何処まで逃げても離れない、まるで自分自身の影のような「焼き」に始終追いかけられて、仕事をした。仕事が尻しりあが上りに、目盛りをあげて行つた。

人間の身体には、どの位の限度があるか、然しそれは当の本人よりも監督の方が、よく知っていた。——仕事が終つて、丸太棒のように柵たなの中に横倒れに倒れると、「期せずして」う、う——、うめいた。

学生の一人は、小さい時は祖母に連れられて、お寺の薄暗いお堂の中で見たことのある「地獄」の絵が、そのままこうであることを思い出した。それは、小さい時の彼には、丁度うわばみのよはうな動物が、沼地による、によると這はつているのを思わせた。

それとそっくり同じだった。——過労がかえって皆を眠らせない。夜中過ぎて、突然、硝子ガラスの表に思いツ切り疵きずを付けるような無気味な歯ぎしりが起つたり、寝言や、うなされていうしるらしい突調とつぴよ子うしな叫声が、薄暗い「糞壺」の所々から起つた。

彼等は寝れずにいるとき、フト、「よく、まだ生きているな……」と自分で自分の生身の身体にささやきかえすことがある。よく、まだ生きていうしる。——そう自分の身体に！

学生上りは一番「こたえて」いた。

「ドストイェフスキーの死人の家な、ここから見れば、あれだつて大したことでないてぬぐいって気がする」——その学生は、糞くそが何日もつまつて、頭てぬぐいを手拭てぬぐいで力一杯に締めないと、眠れなかつた。

「それアそうだろう」相手は函館からもつてきたウイスキーを、薬でも飲むように、舌の先きで少しずつ嘗^なめていた。「何んしろ大事業だからな。人跡未到の地の富源を開発するツてんだから、大変だよ。——この蟹^{かにこうせん}工船だつて、今はこれで良くなつたそうだよ。天候や潮流の変化の観測が出来なかつたり、地理が実際にマスターされていなかつたりした創業当時は、幾ら船が沈没したりしたか分らなかつたそうだ。露国の船には沈められる、捕虜になる、殺される、それでも屈しないで、立ち上り、立ち上り苦闘して来たからこそ、この大富源が俺たちのものになつたのさ。……まア仕方がないさ」

「……………」

——歴史が何時でも書いているように、それはそうかも知れない気がする。然し、彼の心の底にわだかまっているムツとした気持が、それでちつとも晴れなく思われた。彼は黙ってベニヤ板のように固くなっている自分の腹を撫なでた。弱い電気に触れるように、拇おやゆび指のあたりが、チャラチャラとしびれる。イヤな気持がした。拇指を眼の高さにかざして、片手でさすってみた。——皆は、夕飯が終つて、「糞壺」の真中に一つ取りつけてある、割目が地図のように入っているガタガタのストーヴに寄っていた。お互の身体が少し温あたたまつてくると、湯気が立った。蟹の生ツ臭におい匂いがムレて、ムツと鼻に來た。

「何んだか、理窟は分らねども、殺されたくねえで」

「んだよ！」

憂々した気持が、もたれかかるように、其処へ雪崩れて行く。殺されかかっているんだ！ 皆はハッキリした焦点もなしに、怒りッぽくなっていた。

「お、俺だちの、も、ものにもならないのに、く、糞くそ、こッ殺されてたまるもんか！」

吃どもりの漁夫が、自分でももどかしく、顔を真赤に筋張らせて、急に、大きな声を出した。

一寸ちよつと、皆だまつた。何かにグイと心を「不意」に突き上げられた——のを感じた。

「カムサツカで死にたくないな……」

「……………」

「中積船、函館ば出たとよ。——無電係の人云つてた」

「歸りてえな」

「歸れるもんか」

「中積船でヨク逃げる奴がいるつてな」

「んか?! ……ええな」

「漁に出る振りして、カムサツカの陸さ逃げて、露助と一緒に赤化宣伝ばやってるものもいるツてな」

「……………」

「日本帝国のためか、——又、いい名義を考えたもんだ」——学生は胸のボタンを外して、階段のように一つ一つ窪みの出来てい

る胸を出して、あくびをしながら、ゴシゴシ搔いた。垢が乾いて、薄い雲母のように剥げてきた。

「んよ、か、会社の金持ばかり、ふ、ふんだくるくせに」

カキの貝殻のように、段々のついた、たるんだ眼蓋から、弱々しい濁った視線をストオヴの上にボンヤリ投げていた中年を過ぎた漁夫が唾をはいた。ストオヴの上に落ちると、それがクルツクルツと真円にまろくなって、ジュウジュウ云いながら、豆のように跳ね上って、見る間に小さくなり、油煙粒ほどの小さいカスを残して、無くなった。皆はそれにウカツな視線を投げている。

「それ、本当かも知れないな」

然し、船頭が、ゴム底タビの赤毛布の裏を出して、ストーヴに

かざしながら、「おいおい叛逆てむかいなんかしないでくれよ」と云つた。

「……………」

「勝手だべよ。糞」吃りが唇を蛸たこのように突き出した。

ゴムの焼けかかっているイヤな臭いがした。

「おい、親爺おど、ゴム！」

「ん、あ、こげた！」

波が出て来たらしく、サイドが微かすかになつてきた。船も子守唄うた程に揺れている。腐った海漿ほおずきのような五燭燈でストーヴを囲んでいるお互の、後に落ちている影が色々にもつれて、組合つた。

——静かな夜だった。ストーヴの口から赤い火が、膝ひざから下にチ

ラチラと反映していた。不幸だった自分の一生が、ひよいと——まるつきり、ひよいと、しかも一瞬間だけ見返される——不思議に静かな夜だった。

「煙草無えか？」

「無え……」

「無えか？……」

「なかつたな」

「糞」

「おい、ウイスキーをこつちにも廻せよ、な」

相手は角瓶かくびんを逆かさに振ってみせた。

「おツと、勿もったい体ねえことするなよ」

「ハハハハハハ」

「飛んでもねえ所さ、然し来たもんだな、俺も……」その漁夫は芝浦の工場にいたことがあつた。その話がそれから出た。それは北海道の労働者達には「工場」だとは想像もつかない「立派な処」に思われた。「ここの百に一つ位のことがあつたつて、あつちじゃストライキだよ」と云つた。

その事から——そのキツかけで、お互の今までしてきた色々のことが、ひよいひよいと話に出てきた。「国道開たく工事」「灌^か漑^ん工事」「鉄道敷設」「築港埋立」「新鉞発掘」「開墾」「積取人夫」「鍊^に取り」——殆^{ほと}んど、そのどれかを皆はしてきていた。

——内地では、労働者が「横^{おう}平^{へい}」になつて無理がきかなくな

り、市場も大体開拓されつくして、行詰つてくると、資本家は「北海道・樺太へ！」鉤爪かぎづめをのぼした。其処そこでは、彼等は朝鮮や、台湾の殖民地と同じように、面白い程無茶な「虐使」が出来た。然し、誰も、何んとも云えない事を、資本家はハッキリ呑み込んでいた。「国道開たく」「鉄道敷設」の土工部屋では、虱しらみより無雑作に土方がタタキ殺された。虐使に堪たえられなくて逃亡する。それが捕つかまると、棒杭ぼうぐいにしばりつけて置いて、馬の後足で蹴けらせたり、裏庭で土佐犬に噛かみ殺させたりする。それを、しかも皆の目の前でやってみせるのだ。肋骨ろっこつが胸の中で折れるボクツとこもった音をきいて、「人間でない」土方さえ思わず顔を抑えるものがいた。氣絶をすれば、水をかけて生かし、それを何度

も何度も繰りかえした。終いには風呂敷包みのように、土佐犬の強^{きようじん} 韌^{じん}な首で振り廻わされて死ぬ。ぐったり広場の隅^{すみ}に投げ出されて、放つて置かれてからも、身体の何処かが、ピクピクと動いていた。焼^{やけ}火^ひ箸^{ばし}をいきなり尻にあてることや、六角棒で腰が立たなくなる程なぐりつけることは「毎日」だった。飯を食っていると、急に、裏で鋭い叫び声^{こゑ}が起る。すると、人の肉が焼ける生ツ臭い匂いが流れてきた。

「やめた、やめた。——とても飯なんて、食えたもんじゃねえや」箸を投げる。が、お互暗い顔で見合った。

脚^{かっけ}気^けでは何人も死んだ。無理に働かせるからだった。死んでも「暇がない」ので、そのまま何日も放つて置かれた。裏へ出る暗

がりに、無雑作にかけてあるムシロの裾すそから、子供のように妙に小さくなつた、黄黒く、艶つやのない両足だけが見えた。

「顔に一杯蠅はえがたかっているんだ。側を通つたとき、一度にワアーンと飛び上るんでないか！」

額を手でトントン打ちながら入つてくると、そう云う者があつた。

皆は朝は暗いうちに仕事場に出された。そして鶴つる嘴はしのさきがチラツ、チラツと青白く光つて、手元が見えなくなるまで、働かされた。近所に建っている監獄で働いている囚人の方を、皆はかえつて羨うらやましがつた。殊ことに朝鮮人は親方、棒ぼう頭がしらからも、同じ仲間仲間の土方（日本人の）からも「踏んづける」ような待遇をうけて

いた。

其処から四、五里も離れた村に駐在している巡查が、それでも時々手帖をもつて、取調べにテクテクやってくる。夕方までいたり、泊りこんだりした。然し土方達の方へは一度も顔を見せなかつた。そして、帰りには真赤な顔をして、歩きながら道の真中を、消防の真似まねでもしているように、小便を四方にジャジャやりながら、分らない独言を云つて帰つて行つた。

北海道では、字義通り、どの鉄道の枕木もそれはそのまま一本々々労働者の青むくれた「死骸」だった。築港の埋立には、脚気の土工が生きたまま「人柱」のように埋められた。——北海道の、そういう労働者を「タコ（蛸）」と云っている。蛸は自分が生き

て行くためには自分の手足をも食ってしまふ。これこそ、全くそつくりではないか！　そこでは誰をも憚はばらない「原始的」な搾取が出来た。「儲もうけ」がゴゾリ、ゴゾリ掘りかえつてきた。しかも、そして、その事を巧みに「国家的」富源の開発ということに結びつけて、マンマと合理化していた。抜目がなかった。「国家」のために、労働者は「腹が減り」「タタき殺されて」行つた。

「其あこ処から生きて帰れたなんて、神助け事だよ。有難かつたな！　んでも、この船で殺されてしまったら、同じだべよ。——何アーんでえ！」そして突とつ調び子ようなく大きく笑つた。その漁夫は笑つてしまつてから、然まゆし眉のあたりをアリアリと暗くして、横を向いた。

鉦^{やま}山でも同じだった。——新しい山に坑道を掘る。そこにどんな瓦斯^{ガス}が出るか、どんな飛んでもない変化が起るか、それを調べあげて一つの確針をつかむのに、資本家は「モルモット」より安く買える「労働者」を、乃木軍神がやったと同じ方法で、入り代り、立ち代り雑作なく使い捨てた。鼻紙より無雑作に！ 「マグロ」の刺身のような労働者の肉片が、坑道の壁を幾重にも幾重にも丈夫にして行つた。都会から離れていることを好い都合にして、此処でもやはり「ゾツ」とすることが行われていた。トロツコで運んでくる石炭の中に拇^{おやゆび}指や小指がバラバラに、ねばつて交つてくることがある。女や子供はそんな事には然し眉を動かしてはならなかつた。そう「慣らされていた」彼等は無表情に、それを

次の持場まで押し立てゆく。——その石炭が巨大な機械を、資本家の「利潤」のために動かした。

どの坑夫も、長く監獄に入れられた人のように、艶つやのない黄色くむくんだ、始終ボンヤリした顔をしていた。日光の不足と、炭た塵じんと、有毒ガスを含んだ空気と、温度と気圧の異常とで、眼に見えて身体がおかしくなつてゆく。「七、八年も坑夫をしていれば、凡およそ四、五年間位は打ぶツ続けに真暗闇まつくらやみの底にいて、一度だつて太陽を拝まなかつたことになる、四、五年も！」——だが、どんな事があるうと、代りの労働者を何時でも沢山仕入れることの出来る資本家には、そんなことはどうでもいい事であつた。冬が来ると、「やはり」労働者はその坑山に流れ込んで行つた。

それから「入地百姓」——北海道には「移民百姓」がいる。

「北海道開拓」「人口食糧問題解決、移民奨励」、日本少年式な「移民成金」など、ウマイ事ばかり並べた活動写真を使つて、田畑を奪われそうになつてゐる内地の貧農を煽動して、移民を奨励して置きながら、四、五寸も掘り返せば、下が粘土ばかりの土地に放り出される。豊饒ほうじょうな土地には、もう立札が立つてゐる。雪の中に埋められて、馬鈴薯も食えずに、一家は次の春には餓死することがあつた。それは「事実」何度もあつた。雪が溶けた頃になつて、一里も離れている「隣りの人」がやってきて、始めてそれが分つた。口の中から、半分嘔のみかけてゐる藁屑わらくずが出てきたりした。

稀まれに餓死から逃れ得ても、その荒ブ地を十年もかかって耕やし、ようやくこれで普通の畑になったと思える頃、実はそれにちアんと、「外の人」のものになるようになっていた。資本家は——高利貸、銀行、華族、大金持は、嘘うそのような金を貸して置けば、（投げ捨てて置けば）荒地は、肥えた黒猫の毛並のように豊饒な土地になって、間違なく、自分のものになってきた。そんな事を真似て、濡手をきめこむ、目の鋭い人間も、又北海道に入り込んできた。——百姓は、あつちからも、こつちからも自分のものを噛かみとられて行つた。そして終しまいには、彼等が内地でそうされたと同じように「小作人」にされてしまっていた。そうなつて百姓は始めて気付いた。——「失敗しまつた！」

彼等は少しでも金を作つて、故里ふるさとの村に帰ろう、そう思つて、津軽海峡を渡つて、雪の深い北海道へやつてきたのだつた。——蟹工船にはそういう、自分の土地を「他人」に追い立てられて来たものが沢山いた。

積取人夫は蟹工船の漁夫と似ていた。監視付きの小樽おたるの下宿屋にゴロゴロしていると、樺太かばふとや北海道の奥地へ船で引きずられて行く。足を「一寸いっすん」すべらすと、ゴンゴンとうなりながら、地響をたてて転落してくる角材の下になって、南部センベイよりも薄くされた。ガラガラとウインチで船に積まれて行く、水で皮がペロペロになつている材木に、拍子を食つて、一なぐりされると、頭のつぶれた人間は、蚤のみの子よりも軽く、海の中へたたき込

まれた。

——内地では、何時までも、黙って「殺されていない」労働者が一かたまりに固って、資本家へ反抗している。然し「殖民地」の労働者は、そういう事情から完全に「遮断^{しやだん}」されていた。

苦しくて、苦しくてたまらない。然し転^{ころ}んで歩けば歩く程、雪ダルマのように苦しみを身体に背負い込んだ。

「どうなるかな……?」

「殺されるのさ、分ってるべよ」

「……………」何か云いたげな、然しグイとつまつたまま、皆だまつた。

「こ、こ、殺される前に、こっちから殺してやるんだ」どもりが

ブツきら棒に投げつけた。

トブーン、ドブーンとゆるく腹サイドに波が当たっている。上甲板の方で、何処かのパイプからステイムがもれているらしく、シー、シー、ン、シー——ンという鉄瓶てつびんのたぎるような、柔かい音が絶えずしていた。

寝る前に、漁夫達は垢あかでスルメのようにガバガバになったメリヤスやネルのシャツを脱いで、ストーヴの上に広げた。囲んでいるもの達が、炬燵こたつのように各その端をもつて、熱くしてからバタバタとほろつた。ストーヴの上に虱しらみや南京虫が落ちると、プツン、プツンと、音をたてて、人が焼ける時のような生ツ臭い臭いにお

がした。熱くなると、居たまらなくなつた虱が、シャツの縫目から、細かい沢山の足を夢中に動かして、出て来る。つまみ上げると、皮膚の脂肪あぶらツぽいコロツとした身体の感触がゾツときた。かまきり虫のような、無気味な頭が、それと分る程肥えているのもいた。

「おい、端を持ってくれ」
ふんどし
 禪の片端を持ってもらつて、広げながら虱をとつた。

漁夫は虱を口に入れて、前歯で、音をさせてつぶしたり、両方の拇おやゆび指の爪で、爪が真赤になるまでつぶした。子供が汚い手をすぐ着物に拭ふくように、裨はんでん天の裾すそにぬぐうと、又始めた。――
 それでも然し眠れない。何処から出てくるか、夜通し虱と蚤のみと南ナ

ンキンむし
京虫に責められる。いくらどうしても退治し尽されなかつた。

薄暗く、ジメジメしている棚に立っていると、すぐモゾモゾと何
十匹もの蚤が脛すねを這はい上つてきた。終しまいには、自分の体の何処か
が腐くつてもいけないのか、と思つた。蛆うじや蠅あぶらに取りつかれている
腐爛ふらんした「死体」ではないか、そんな不気味さを感じた。

お湯には、初め一日置きに入れた。身体が生ツ臭くよごれて仕
様がなかつた。然し一週間もすると、三日置きになり、一カ月位
経つと、一週間一度。そしてとうとう月二回にされてしまった。
水の濫費らんびを防ぐためだつた。然し、船長や監督は毎日お湯に入つ
た。それは濫費にはならなかつた。(！)——身体が蟹の汁で汚
れる、それがそのまま何日も続く、それで虱か南京虫が湧わかない

「^{はず}筈」がなかった。

禪を解くと、黒い粒々がこぼれ落ちた。禪をしめたあとが、赤くかたがついて、腹に輪を作った。そこがたまらなく搔^かゆかった。寝ていると、ゴシゴシと身体をやけにかく音が何処からも起った。モゾモゾと小さいゼンマイのようなものが、身体の下側を走るかと思うと——刺す。その度に漁夫は身体をくねらし、寝返りを打った。然し又すぐ同じだった。それが朝まで続く。皮膚が皮癬^{ひぜん}のように、ザラザラになった。

「死に虱^ひだべよ」

「んだ、丁度ええさ」

仕方なく、笑ってしまった。

五

あわてた漁夫が二、三人デツキを走つて行つた。

曲り角で、急にまがれず、よろめいて、手すりにつかまつた。

サロン・デツキで修繕をしていた大工が背のびをして、漁夫の走つて行つた方を見た。寒風の吹きさらしで、涙が出て、初め、よく見えなかつた。大工は横を向いて勢いよく「つかみ鼻」をかんだ。鼻汁が風にあふられて、歪ゆがんだ線を描いて飛んだ。

ともの左舷のウインチがガラガラなっている。皆漁に出ている今、それを動かしているわけがなかつた。ウインチにはそして何

かブラ下っていた。それが揺れている。吊り下がっているワイヤーが、その垂直線の囲りを、ゆるく円を描いて揺れていた。「何んだべ？」——その時、ドキツと来た。

大工は周章あわてたように、もう一度横を向いて「つかみ鼻」をかんだ。それが風の工合でズボンにひっかかった。トロツとした薄い水鼻だった。

「又、やってやがる」大工は涙を何度も腕で拭ぬぐいながら眼をきめた。

こつちから見ると、雨上りのような銀灰色の海をバックに、突き出ているウインチの腕、それにすっかり身体を縛られて、吊し上げられている雑夫が、ハッキリ黒く浮び出てみえた。ウインチ

の先端まで空を上ってゆく。そして雑巾ぞうきん切れでもひツかかったように、しばらくの間——二十分もそのままに吊下げられている。それから下がって行つた。身体をくねらして、もがいているらしく、両足が蜘蛛くもの巣にひっかかった蠅はえのように動いている。

やがて手前のサロンの陰になつて、見えなくなつた。一直線に張っていたワイヤーだけが、時々ブランコのように動いた。

涙が鼻に入つてゆくらしく、水鼻がしきりに出た。大工は又「つかみ鼻」をした。それから横ポケットにブランブランしている金槌かなづちを取つて、仕事にかかった。

大工はひよいと耳をすまして——振りかえつて見た。ワイヤ・ロープが、誰か下で振っているように揺れていて、ボクンボクン

と鈍い不気味な音は其処そこからしていた。

ウインチに吊された雑夫は顔の色が変っていた。死体のように堅くしめている唇から、泡あわを出していた。大工が下りて行つた時、雑夫長が薪まきを脇わきにはさんで、片肩を上げた窮屈な恰かつこう好で、デツキから海へ小便をしていた。あれでなぐつたんだな、大工は薪をちらつと見た。小便は風が吹く度に、ジャ、ジャとデツキの端にかかつて、はねを飛ばした。

漁夫達は何日も何日も続く過労のために、だんだん朝起きられなくなつた。監督が石油の空あきかん罐を寝ている耳もとでたたいて歩いた。眼を開けて、起き上るまで、やけに罐をたたいた。脚かっけ氣のもの、頭を半分上げて何か云っている。然しかし監督は見ない振り

で、空罐をやめない。声が聞えないので、金魚が水際に出てきて、空気を吸っている時のように、口だけパクパク動いてみえた。いい加減たたいてから、

「どうしたんだ、タタキ起すぞ！」と怒鳴りつけた。「いやしくも仕事が国家的である以上、戦争と同じなんだ。死ぬ覚悟で働け！ 馬鹿野郎」

病人は皆蒲団ふとんを剥はぎとられて、甲板へ押し出された。脚気のものは階段の段々に足先がつかまらずいた。手すりにつかまりながら、身体を斜めにして、自分の足を自分の手で持ち上げて、階段を上がった。心臓が一足毎に無気味にピンピン蹴けるようにはね上った。

監督も、雑夫長も病人には、継子ままこにでも対するようにジリジリ

と陰険だった。「肉詰」をしてしていると追い立てて、甲板で「爪たき」をさせられる。それを一寸ちよつとしていると「紙巻」の方へ廻わされる。底寒くて、薄暗い工場の中ですべる足元に気をつけながら、立ちつくしていると、膝ひざから下は義足に触るより無感覚になり、ひよいとすると膝の関節が、蝶ちようつがいつが離れたように、不覚にへナへナと坐り込んでしまひそうになつた。

学生が蟹をつぶした汚れた手の甲で、額を軽くたたいていた。一寸すると、そのまま横倒しに後へ倒れてしまった。その時、側に積かさなつていた罐詰の空罐がひどく音をたてて、学生の倒れた上に崩れ落ちた。それが船の傾斜に沿つて、機械の下や荷物の間に、光りながら円く転んで行つた。仲間が周章しうしやうてて学生をハツ

ちに連れて行こうとした。それが丁度、監督が口笛を吹きながら工場に下りてきたのと、会った。ひよいと見てとると、

「誰が仕事を離れたんだ！」

「誰が!?!……」思わずグツと来た一人が、肩でつつかかるようにせき込んだ。

「誰がア——? この野郎、もう一度云ってみろ！」監督はポケットからピストルを取り出して、玩具のようにいじり廻わした。それから、急に大声で、口を三角形にゆがめながら、背のびをするように身体をゆすって、笑い出した。

「水を持って来い！」

監督は桶おけ一杯に水を受取ると、枕木のように床に置き捨てにな

つている学生の顔に、いきなり——一度に、それを浴せかけた。
 「これでええんだ。——要いらないものなんか見なくてもええ、仕事でもしやがれ！」

次の朝、雑夫が工場に下りて行くと、旋盤の鉄柱に、前の日の学生が縛りつけられているのを見た。首をひねられた鶏のように、首をガクリ胸に落とし込んで、背筋の先端に大きな関節を一つポコンと露あらわに見せていた。そして子供の前掛けのように、胸に、それが明らかに監督の筆致で、

「此者ハ不忠ナル偽病者ニツキ、麻あさなわ繩ヲ解クコトヲ禁ズ」
 と書いたボール紙を吊していた。

額に手をやってみると、冷えきった鉄に触るより冷たくなって

いる。雑夫等は工場に入るまで、ガヤガヤしゃべっていた。それが誰も口をきくものがない。後から雑夫長の下りてくる声をきくと、彼等はその学生の縛られている機械から二つに分れて各々の持場に流れて行つた。

蟹漁が忙がしくなると、ヤケに当つてくる。前歯を折られて、一晩中「血の唾」をはいたり、過労で作業中に卒倒したり、眼から血を出したり、平手で滅茶苦茶に叩かれて、耳が聞えなくなつたりした。あんまり疲れてくると、皆は酒に酔つたよりも他愛なくなつた。時間がくると、「これでいい」と、フト安心すると、瞬間クラクラツとした。

皆が仕舞いかけると、

「今日は九時までだ」と監督が怒鳴って歩いた。「この野郎達、仕舞いだって云う時だけ、手廻わしを早くしやがって！」

皆は高速度写真のようにノロノロ又立ち上った。それしか気力がなくなっていた。

「いいか、此処ここへは二度も、三度も出直して来れるところじゃないんだ。それに何時いつだって蟹が取れるとも限ったものでもないんだ。それを一日の働きが十時間だから十三時間だからって、それでピッタリやめられたら、飛んでもないことになるんだ。——仕事の性質たちが異ちがうんだ。いいか、その代り蟹が採れない時は、お前達を勿体ない程ブラブラさせておくんだ」監督は「糞壺」へ降りてきて、そんなことを云った。「露助はな、魚が何んぼ眼の前で

群化^{くき}てきても、時間が来れば一分も違わずに、仕事をブン投げてしまふんだ。んだから——んな心掛けだから露西亞^{ロシア}の国がああなつたんだ。日本男児の断じて真似^{まね}てならないことだ！」

何に云ってるんだ、ペテン野郎！ そう思つて聞いていないものもあつた。然し大部分は監督にそう云われると日本人はやはり偉いんだ、という気にされた。そして自分達の毎日の残虐な苦しさ、何か「英雄的」なものに見え、それがせめても皆を慰めさせた。

甲板で仕事をしていると、よく水平線を横切つて、駆逐艦が南下して行つた。後尾に日本の旗がはためくのが見えた。漁夫等は興奮から、眼に涙を一杯ためて、帽子をつかんで振つた。——あ

れだけだ。俺達の味方は、と思った。

「畜生、あいつを見ると、涙が出やがる」

だんだん小さくなって、煙にまつわって見えなくなるまで見送った。

雑巾切れのように、クタクタになって帰ってくると、皆は思い合わせたように、相手もなく、ただ「畜生！」と怒鳴った。暗がり、それは憎悪ぞうおに満ちた牝牛おうしの唸り声うなに似ていた。誰に対してか彼等自身分つてはいなかったが、然し毎日々々同じ「糞壺」の中において、二百人近くのもの等がお互にブツキラ棒にしゃべり合っているうちに、眼に見えずに、考えること、云うこと、するところが、（なめくじが地面を匍はうほどののろさだが）同じになって

行つた。——その同じ流れのうちでも、勿論澱よどんだように足ぶみをするものが出来たり、別な方へ外それて行く中年の漁夫もある。然しそのどれもが、自分では何んにも気付かないうちに、そうなつて行き、そして何時の間にか、ハッキリ分れ、分れになつていた。

朝だつた。タラップをノロノロ上りながら、炭山やまから来た男が、「とても続かねえや」と云つた。

前の日は十時近くまでやって、身体は壊こわれかかつた機械のようにギクギクしていた。タラップを上りながら、ひよいとすると、眠つていた。後から「オイ」と声をかけられて思わず手と足を動かす。そして、足を踏はみ外はずして、のめつたまま腹はらん這ばいになつた。

仕事につく前に、皆が工場に降りて行つて、かたすみ片隅に溜たまつた。どれも泥人形のような顔をしている。

「俺ア仕事サボるんだ。出来ねえ」——やま炭山だつた。皆も黙つたまま、顔を動かした。

一寸して、

「大焼きが入るからな……」と誰か云つた。

「ずるけてサボるんでねえんだ。働けねえからだよ」

やま炭山が袖をじょうはく上膊のところまで、まくり上げて、眼の前ですかして見るようにかざした。

「長げえことねえんだ。——俺アずるけてサボるんでねえんだど」

「それだら、そんだ」

「……………」

その日、監督は鷄冠とさかをピンと立てた喧嘩けんか鷄どりのように、工場を廻つて歩いていた。「どうした、どうした!」と怒鳴り散らした。がノロノロと仕事をしているのが一人、二人でなしに、あつちでも、こつちでも——殆ほとんど全部なので、ただイライラ歩き廻るこゝとしか出来なかつた。漁夫達も船員もそういう監督を見るのは始めてだつた。上甲板で、網から外した蟹が無数に、ガサガサと歩く音がした。通りの悪い下水道のように、仕事がドンドンつまつて行つた。然し「監督の棍こん棒ぼう」が何の役にも立たない!

仕事が終わつてから、煮しまった手てぬぐい拭ぬぐで首を拭きながら、皆ゾロゾロ「糞壺」に帰つてきた。顔を見合うと、思わず笑い出した。

それが何故か分らずに、おかしくて、おかしくて仕様がなかった。
それが船員の方にも移って行つた。船員を漁夫とにらみ合わせ
て、仕事をさせ、いい加減に馬鹿をみせられていたことが分ると、
彼等も時々「サボリ」出した。

「昨日ウンと働き過ぎたから、今日はサボだど」

仕事の出しなに、誰かそう云うと、皆そうなつた。然し「サボ」
と云つても、ただ身体を楽に使うということではしかなかつたが。

誰だつて身体がおかしくなつていた。イザとなつたら「仕方が
ない」やるさ。「殺されること」はどつち道同じことだ。そんな
気が皆にあつた。——ただ、もうたまらなかつた。

「中積船だ！ 中積船だ！」上甲板で叫んでいるのが、下まで聞えてきた。皆は思い思い「糞壺」の棚からボロ着のまま跳ね下りた。

中積船は漁夫や船員を「女」よりも夢中にした。この船だけは塩ツ臭くない、——函館の匂いがしていた。何カ月も、何百日も踏みしめたことのない、あの動かない「土」の匂いがしていた。それに、中積船には日附の違った何通りもの手紙、シャツ、下着、雑誌などが送りとどけられていた。

彼等は荷物を蟹臭い節立った手で、驚わしづかみにすると、あわて

×

×

×

たように「糞壺」にかけ下りた。そして棚に大きな安坐あぐらをかい、その安坐の中で荷物を解いた。色々のものが出る。——側から母親がものを云つて書かせた、自分の子供のたどたどしい手紙や、手拭、齒磨、楊子ようじ、チリ紙、着物、それ等の合せ目から、思いがけなく妻の手紙が、重さでキチンと平べったくなくて、出てきた。彼等はその何処からでも、陸にある「自家うち」の匂いをかぎ取ろうとした。乳臭い子供の匂いや、妻のムツとくる膚の臭いにおを探がした。

.....

おそそにかつれて困っている、

三錢切手でとどくなら、

おそろ罐詰で送りたい——かッ！

やけに大声で「ストトン節」をどなった。

何んにも送つて来なかつた船員や漁夫は、ズボンのポケットに棒のように腕をつツこんで、歩き廻っていた。

「お前の居ない間に、男でも引ツ張り込んでるだんべよ」
皆にからかわれた。

薄暗い隅すみに顔を向けて、皆ガヤガヤ騒いでいるのをよそに、何度も指を折り直して、考え込んでいるのがいた。——中積船で来た手紙で、子供の死んだ報知しらせを読んだのだった。二カ月前に死んでいた子供の、それを知らずに「今まで」いた。手紙には無線

を頼む金もなかったの、と書かれていた。漁夫が!! と思われ
る程、その男は何時までムツつりしていた。

然し、それと丁度反対のがあった。ふやけた蝟たこの子のような赤
子の写真が入っていたりした。

「これがか」と、頓とんきよう狂な声で笑い出してしまう。

それから「どうだ、これが産れたんだとよ」と云つてワザワザ
一人々々に、ニコニコしながら見せて歩いた。

荷物の中には何んでもないことで、然し妻でなかったら、やは
り気付かないような細かい心配りの分るものが入っていた。そん
な時は、急に誰でも、バタバタと心が「あやしく」騒ぎ立った。

——そして、ただ、無性に帰りたかった。

中積船には、会社で派遣した活動写真隊が乗り込んできていた。出来上っただけの罐詰を中積船に移してしまつた晩、船で活動写真を映すことになつた。

平べつたい鳥打ちを少し横めにかぶり、蝶ちようネクタイをして、太いズボンをはいた、若い同じような恰好かつこうの男が二、三人トランクを重そうに持つて、船へやつてきた。

「臭い、臭い！」

そう云いながら、上着を脱いで、口笛を吹きながら、幕をはつたり、距離をはかつて台を据えたりし始めた。漁夫達は、それ等の男から、何か「海で」ないもの——自分達のようなものでないもの、を感じ、それにひどく引きつけられた。船員や漁夫は何処

か浮かれ気味で、彼等の仕度したくに手伝った

一番年かさらしい下品に見える、太い金縁の眼鏡をかけた男が、少し離れた処とこに立って、首の汗を拭いていた。

「弁士さん、そつたら処とこさ立ってれば、足から蚤のみがハネ上って行きますよ！」

と、「ひやア——ツ！」焼けた鉄板でも踏んづけたようにハネ上った。

見ていた漁夫達がドツと笑った。

「然しひどい所ところにいるんだな！」しやがれた、ジャラジャラ声だった。それはやはり弁士だった。

「知らないだろうけれども、この会社が此処ここへこうやって、やつ

て来るために、幾何儲いくらかもせうけていると思う？ 大したもんだ。六カ月に五百万円だよ。一年千万円だ。——口で千万円つて云えば、それっ切りだけでも、大したもんだ。それに株主へ二割二分五厘なんて滅法界もない配当をする会社なんて、日本にだってそうないんだ。今度社長が代議士になるツて云うし、申分がないさ。——やはり、こんな風にしてもひどくしなけア、あれだけ儲けられないんだらうな」

夜になった。

「一万箱祝」を兼ねてやることになり、酒、焼しようちゆう酎、するめにしめ、バツト、キャラメルが皆の間に配られた。

「さ、親父おどのどこさ来い」

雑夫が、漁夫、船員の間にも、引張り尻だこになつた。「安坐あぐらさ抱いて見せてやるからな」

「危い、危い！ 俺のどこさ来いてば」

それがガヤガヤしばらく続いた。

前列の方で四、五人が急に拍手した。皆も分らずに、それに続けて手をたたいた。監督が白い垂幕の前に出てきた。——腰をのばして、両手を後に廻わしながら、「諸君は」とか、「私は」とか、普段云つたことのない言葉を出したり、又何いつ時もの「日本男児」だとか、「国富」だとか云い出した。大部分は聞いていなかつた。こめかみと顎あごの骨を動かしながら、「するめ」を咬かんでいた。

「やめろ、やめろ！」後から怒鳴る。

「お前えなんか、ひっこめ！ 弁士がいるんだ、ちアんと」

「六角棒の方が似合うぞ！」——皆ドツと笑った。口笛をピユウピユウ吹いて、ヤケに手をたたいた。

監督もまさか其^{そこ}処では怒れず、顔を赤くして、何か云うと（皆が騒ぐので聞えなかった）引つ込んだ。そして活動写真が始まった。

最初「実写」だった。宮城、松島、江ノ島、京都……が、ガタピシヤガタピシヤと写って行つた。時々切れた。急に写真が二、三枚ダブって、目まいでもしたように入り乱れたかと思うと、瞬間消えて、パツと白い幕になった。

それから西洋物と日本物をやった。どれも写真はキズが入っていて、ひどく「雨が降った」それに所々切れているのを接合させたらしく、人の動きがギクシヤクした。——然しそんなことはどうでもよかった。皆はすっかり引き入れられていた。外国のいい身体をした女が出てくると、口笛を吹いたり、豚のように鼻をならした。弁士は怒ってしばらく説明しないこともあった。

西洋物はアメリカ映画で、「西部開発史」を取扱ったものだった。——野蛮人の襲撃をうけたり、自然の暴虐に打ち壊こわされては、又立ち上り、一いっけん間々々と鉄道をのぼして行く。途中に、一夜作りの「町」が、まるで鉄道の結びゴブのように出来る。そして鉄道が進む、その先きへ、先きへと町が出来て行った。——其処か

ら起る色々な苦難が、一工夫と会社の重役の娘との「恋物語」ともつれ合つて、表へ出たり、裏になつたりして描かれていた。最後の場面で、弁士が声を張りあげた。

「彼等幾多の犠牲的青年によつて、遂に成功するに至つた延々何百哩マイルの鉄道は、長蛇の如く野を走り、山を貫き、昨日までの蛮地は、かくして国富と變つたのであります」

重役の娘と、何時いつの間にか紳士のようになつた工夫が相抱くところ幕だつた。

間に、意味なくゲラゲラ笑わせる、短い西洋物が一本はさまつた。

日本の方は、貧乏な一人の少年が「納豆売り」「夕刊売り」な

どから「靴磨き」をやり、工場に入り、模範職工になり、取り立てられて、一大富豪になる映画だった。——弁士は字幕タイトルにはなかつたが、「げに勤勉こそ成功の母ならずして、何んぞや！」と云つた。

それには雑夫達の「真剣な」拍手が起つた。然し漁夫か船員のうちで、

「嘘うそこけ！ そんだつたら、俺なんて社長になつてねかならないべよ」

と大声を出したものがいた。

それで皆は大笑いに笑つてしまった。

後で弁士が、「ああいう処へは、ウンと力を入れて、繰りかえ

し、繰りかえし云つて貰いたいつて、会社から命令されて来たんだ」と云つた。

最後は、会社の、各所属工場や、事務所などを写したものだつた。「勤勉」に働いている沢山の労働者が写つていた。

写真が終つてから、皆は一万箱祝いの酒で酔払つた。

長い間口にしなかつたのと、疲労し過ぎていたので、ペロペロに参つて了しまつた。薄暗い電気の下に、煙草の煙が雲のようにこめていた。空気がムレて、ドロドロに腐つていた。肌脱はだぬぎになつたり、鉢巻をしたり、大きく安坐をかいて、尻をすつかりまくり上げたり、大声で色々なことを怒鳴り合つた。——時々なぐり合ひの喧嘩けんかが起つた。

それが十二時過ぎまで続いた。

脚かっけ気で、何時も寝ていた函館の漁夫が、枕を少し高くして貰つて、皆の騒ぐのを見ていた。同じ処から来ている友達の漁夫は、側の柱に寄りかかりながら、齒にはさまったするめを、マツチの軸で「シイ」「シイ」音をさせてせせっていた。

余程過ぎてからだった。——「糞壺」の階段を南京袋のように漁夫が転がって来た。着物と右手がすっかり血まみれになっていた。

「出刃、出刃！ 出刃を取つてくれ！」土間を匍はいながら、叫んでいる。「浅川の野郎、何処へ行きやがった。居ねえんだ。殺してやるんだ」

監督のためになぐられたことのある漁夫だった。——その男はストーヴのデレツキを持って、眼の色をかえて、又出て行つた。誰もそれをとめなかつた。

「な！」函館の漁夫は友達を見上げた。「漁夫だって、何時も木の根っこみたいな馬鹿でねえんだな。面白くなるぞ！」

次の朝になって、監督の窓硝子まどガラスからテーブルの道具が、すっかり滅茶苦茶に壊こわされていたことが分つた。監督だけは、何処にいたのか運良く「こわされて」いながつた。

六

柔かい雨曇りだった。——前の日まで降っていた。それが上りかけた頃だった。曇った空と同じ色の雨が、これもやはり曇った空と同じ色の海に、時々和なごやかな円るい波紋を落していた。

ひる午過ぎ、駆逐艦がやって来た。手の空いた漁夫や雑夫や船員が、デツキの手すりに寄って、見とれながら、駆逐艦についてガヤガヤ話しあつた。物めずらしかつた。

駆逐艦からは、小さいボートが降ろされて、士官連が本船へやつてきた。サイドに斜めに降ろされたタラップの、下のおどり場には船長、工場代表、監督、雑夫長が待っていた。ボートが横付けになると、お互に拳手の礼をして船長が先頭に上つてきた。監督が上をひよいと見ると、眉まゆと口隅をゆがめて、手を振って見せ

た。「何を見てるんだ。行つてろ、行つてろ！」

「偉張んねえ、野郎！」——ゾロゾロデツキを後のものが前を順に押しながら、工場へ降りて行つた。生ツ臭い匂いが、デツキにただよつて、残つた。

「臭いね」綺麗な口髭くちひげの若い士官が、上品に顔をしかめた。

後からついてきた監督が、周章あわてて前へ出ると、何か云つて、頭を何度も下げた。

皆は遠くから飾りのついた短剣が、歩くたびに尻に当つて、跳ね上がるのを見ていた。どれが、どれよりも偉いとか偉くないとか、それを本気で云い合つた。しまいに喧嘩のようになった。

「ああなると、浅川も見られたもんでないな」

監督のペコペコした^{かつこう}恰好を真似^{まね}して見せた。皆はそれでドツと笑った。

その日、監督も雑夫長もいないので、皆は気楽に仕事をした。唄^{うた}をうたったり、機械越しに^{こわだか}声高に話し合った。

「こんな風に仕事をさせたら、どんなもんだべな」

皆が仕事を終えて、上甲板に上ってきた。サロンの前を通ると、中から酔払って、無遠慮に大声で喚^{わめ}き散らしているのが聞えた。

給仕^{ボーイ}が出てきた。サロンの中は煙草の煙でムンムンしていた。

給仕の上気した顔には、汗が一つ一つ粒になって出ていた。両手に空のビール瓶^{びん}を一杯もっていた。顎^{あご}で、ズボンのポケットを

知らせて、

「顔を頼む」と云った。

漁夫がハンカチを出してふいてやりながら、サロンを見て、

「何してるんだ？」ときいた。

「イヤ、大変さ。ガブガブ飲みながら、何を話してるかって云えば——女のアレがどうしたとか、こうしたとかよ。お蔭で百回も走らせられるんだ。農林省の役人が来れば来たでタラップからタキ落ちる程酔払うしな！」

「何しに来るんだべ？」

給仕は、分らんさ、という顔をして、急いでコック場に走って行った。

箸^{はし}では食いづらいボロボロな南京米に、紙ツ切れのような、実

が浮んでゐる塩ツぽい味噌汁で、漁夫等が飯を食つた。

「食つたことも、見たことも無えん洋食が、サロンさ何んぼも行つたな」

「糞喰え——だ」

テーブルの側の壁には、

- 一、飯のことで文句を云うものは、偉い人間になれぬ。
- 一、一粒の米を大切にせよ。血と汗の賜たまもの物なり。
- 一、不自由と苦しさに耐えよ。

振仮名がついた下手な字で、ビラが貼はらさつていた。下の余白

には、共同便所の中にあるような猥褻な落書がされていた。

飯が終ると、寝るまでの一寸の間、ストーヴを囲んだ。——駆逐艦のことから、兵隊の話が出た。漁夫には秋田、青森、岩手の百姓が多かった。それで兵隊のことになると、訳が分らず、夢中になった。兵隊に行つてきたものが多かった。彼等は、今では、その当時の残虐に充ちた兵隊の生活をかえつて懐なつかしいものに、色々想おもい出していた。

皆寝てしまうと、急に、サロンで騒いでいる音が、デッキの板や、サイドを伝つて、此処まで聞えてきた。ひよいと眼をさますと、「まだやっている」のが耳に入った。——もう夜が明けるんじゃないか。誰か——給仕かも知れない、甲板を行つたり、来た

りしている靴の踵かかとのコツ、コツという音がしていた。実際、そして、騒ぎは夜明けまで続いた。

士官連はそれでも駆逐艦に帰って行ったらしく、タラップは降ろされたままになっていた。そして、その段々に飯粒や蟹の肉や茶色のドロドロしたものが、ゴジャゴジャになった嘔吐へどが、五、六段続いて、かかっていた。嘔吐からは腐ったアルコールの臭いにおが強^く、鼻にプーンときた。胸が思わずカアーツとくる匂いだつた。

駆逐艦は翼をおさめた灰色の水鳥のように、見えない程に身体をゆすつて、浮かんでいた。それは身体全体が「眠り」を貪むさぼつているように見えた。煙筒からは煙草の煙よりも細い煙が風のない

空に、毛糸のように上っていた。

監督や雑夫長などは昼になつても起きて来なかつた。

「勝手な畜生だ！」仕事をしながら、ブツブツ云つた。

コック部屋の隅すみには、粗末に食い散らされた空の蟹罐詰やビール瓶が山積みに積まされていた。朝になると、それを運んで歩いたボーイ自身でさえ、よくこんなに飲んだり、食つたりしたものだ、と吃びっくり驚した。

給仕は仕事の関係で、漁夫や船員などが、とても窺うかがい知ることの出来ない船長や監督、工場代表などのムキ出しの生活をよく知っていた。と同時に、漁夫達の惨みじめな生活（監督は酔うと、漁夫達を「豚奴ぶため々々」と云っていた）も、ハッキリ対比されて知って

いる。公平に云つて、上の人間はゴウマンで、恐ろしいことを儲もうけのために「平氣」で謀たくらんだ。漁夫や船員はそれにウマウマ落ち込んで行つた。——それは見ていられなかつた。

何も知らないうちはいい、給仕は何時もそう考えていた。彼は、当然どういふことが起るか——起らないではないか、それが自分に分るように思つていた。

二時頃だつた。船長や監督等は、下手に畳んでおいたために出來たらしい、色々な折目のついた服を着て、罐詰を船員二人に持たして、発動機船で駆逐艦に出掛けて行つた。甲板で蟹外しをして、いた漁夫や雑夫が、手を休めずに「嫁行列」でも見るように、それを見ていた。

「何やるんだか、分つたもんでねえな」

「俺達の作った罐詰ば、まるで糞紙よりも粗末にしやがる！」

「然しな……」中年を過ぎかけている、左手の指が三本よりない漁夫だった。「こんな処まで来て、ワザワザ俺達ば守つててけるんだもの、ええき——な」

——その夕方、駆逐艦が、知らないうちにムクムクと煙突から煙を出し初めた。デツキを急がしく水兵が行つたり来たりし出した。そして、それから三十分程して動き出した。艦尾の旗がハタハタと風にはためく音が聞えた。蟹工船では、船長の発声で、

「万歳」を叫んだ。

夕飯が終つてから、「糞壺」へ給仕がおりてきた。皆はストー

ヴの周囲で話していた。薄暗い電燈の下に立つて行つて、シャツから虱を取つているのもいた。電燈を横切る度に、大きな影がペンキを塗つた、煤すすけたサイドに斜めにうつつた。

「士官や船長や監督の話だけでもな、今度ロシアの領地へこっそり潜入して漁をするそうだと。それで駆逐艦がしつきりなしに、側にいて番をしてくれるそうだと——大部、コレやつてるらしいな。

（拇指と人差指で円るくしてみせた）

「皆の話を聞いていると、金がそのままゴロゴロ転ころがっているよ。うなカムサツカや北樺太など、この辺一帯を、行く行くはどうしても日本のものにするそうだと。日本のアレは支那や満洲ばかりでなしに、こつちの方面も大切だつて云うんだ。それにはここの会

社が三菱などと一緒になって、政府をウマクつつついているらしい。今度社長が代議士になれば、もつとそれをドンドンやるようだよ。

「それでさ、駆逐艦が蟹工船の警備に出動すると云ったところで、どうしてどうして、そればかりの目的でなくて、この辺の海、北樺太、千島の附近まで詳細に測量したり氣候を調べたりするのが、かえって大目的で、万一のアレに手ぬかりなくする訳だな。これア秘密だろうと思うんだが、千島の一番端の島に、コツソリ大砲を運んだり、重油を運んだりしているそうさ。

「俺初めて聞いて吃驚びっくりしたんだけど、今までの日本のどの戦争でも、本当は——底の底を割ってみれば、みんな二人か三

人の金持の（そのかわり大金持の）指図で、動機きっかけだけは色々にかじつけて起したもんだとよ。何んしろ見込のある場所を手に入れたくて、手に入れたくてパタパタしてるんだそうだからな、そいつ等は。——危いそうだ」

七

ウインチがガラガラとなつて、川崎船が下がつてきた。丁度その下に漁夫が四人程居て、ウインチの腕が短いので、下りてくる川崎船をデツキの外側に押しやって、海までそれが下りれるようにしてやっていた。——よく危いことがあつた。ボロ船のウイ

ンチは、脚氣かっけの膝ひざのようにギクシヤクとしていた。ワイヤーを巻いている齒車の工合で、グイと片方のワイヤーだけが跛びっこにのびる。川崎船が燻製くんせい鰯にしんのように、すっかり斜めにブラ下がってしまふことがある。その時、不意を喰くらって、下にいた漁夫がよく怪け我がをした。——その朝それがあつた。「あッ、危い！」誰か叫んだ。真上からタタキのめされて、下の漁夫の首が胸の中に、杭くいのように入り込んでしまった。

漁夫達は船医のところへ抱かかえこんだ。彼等のうちで、今ではハツキリ監督などに対して「畜生！」と思つている者等は、医者に「診断書」を書いて貰うように頼むことにした。監督は蛇に人間の皮をきせたような奴だから、何んとかキット難くせを「ぬかす」

に違いなかった。その時の抗議のために診断書は必要だった。それに船医は割合漁夫や船員に同情を持っていた。

「この船は仕事をして怪我をしたり、病気になったりするよりも、ひツぱたかれたり、たたきのめされたりして怪我したり、病気したりする方が、ずウツと多いんだからねえ」と驚いていた。一々日記につけて、後の証拠にしなければならぬ、と云っていた。それで、病気や怪我をした漁夫や船員などを割合に親切に見てくれていた。

診断書を作って貰いたいんですけれども、一人が切り出した。初め、吃驚したようだった。

「さあ、診断書はねえ……」

「この通りに書いて下さればいいんですが」
はがゆかった。

「この船では、それを書かせないことになってるんだよ。勝手に
そう決めたらしいんだが。……後々のことがあるんでね」

気の短い、吃りどもの漁夫が「チエツ！」と舌打ちをってしまった。
「この前、浅川君になぐられて、耳が聞えなくなった漁夫が来た
ので、何気なく診断書を書いてやったら、飛んでもないことにな
ってしまったてね。——それが何時までも証拠になるんで、浅川君
にしちゃね……」

彼等は船医の室を出ながら、船医もやはり其処まで行くと、も
う「俺達」の味方でなかったことを考えていた。

その漁夫は、然ししか「不思議に」どうか生命を取りとめることが出来た。その代り、日中でもよく何かにつまずいて、のめる程暗い隅すみに転がったまま、その漁夫がうなっているのを、何日も何日も聞かされた。

彼が直りかけて、うめき声が皆を苦しめなくなった頃、前から寝たきりになっていた脚氣の漁夫が死んでしまった。——二十七日だった。東京、日暮里につぼりの周施屋から来たもので、一緒の仲間が十人程いた。然し、監督は次の日の仕事に差支えると云うので、仕事に出していない「病氣のものだけ」で、「お通夜」をさせることにした。

湯灌ゆかんをしてやるために、着物を解いてやると、身体からは、胸

がムカーツとする臭氣がきた。そして無気味な真白い、平べったい風しらみが周章あわててゾロゾロと走り出した。鱗うろこ形こがたに垢あかのついた身体全体は、まるで松の幹が転がっているようだった。胸は、肋ろっこ骨つが一つ一つムキ出しに出ていた。脚氣がひどくなつてから、自由に歩けなかつたので、小便などはその場でもらしたらしく、一面ひどい臭氣だつた。禪ふんどしもシャツも赭あかくろ黒く色が變つて、つまみ上げると、硫酸でもかけたように、ボロボロにくずれそうだつた。臍へその窪くぼみには、垢とゴミが一杯につまつて、臍は見えなかつた。肛門まわの周りには、糞がすっかり乾いて、粘土のようにこびりついていた。

「カムサツカでは死にたくない」——彼は死ぬときそう云つたそ

うだった。然し、今彼が命を落すというとき、側にキツト誰も看
てやった者がいなかったかも知れない。そのカムサツカでは誰だ
つて死にきれないだろう。漁夫達はその時の彼の氣持を考え、中
には声をあげて泣いたものがいた。

湯灌に使うお湯を貰いにゆくと、コックが、「可哀相にな」と
云つた。「沢山持つて行つてくれ。随分、身体が汚れてるべよ」
お湯を持つてくる途中、監督に会つた。

「何処へゆくんだ」

「湯灌だよ」

と云うと、

「ぜいたくに使うな」まだ何か云いたげにして通つて行つた。

帰つてきたとき、その漁夫は、「あの時位、いきなり後ろから彼奴あいつの頭に、お湯をブツかけてやりたくなつた時はなかつた！」と云つた。興奮して、身体をブルブルふる顫ふるわせた。

監督はしつこく廻つてきては、皆の様子を見て行つた。——然し、皆は明日居睡いねむりをしても、のめりながら仕事をしても——例の「サボ」をやつても、皆で「お通夜」をしようということにした。そう決つた。

八時頃になつて、ようやく一通りの用意が出来、線香や蠟燭ろうそくをつけて、皆がその前に坐つた。監督はどうとう来なかつた。船長と船医が、それでも一時間位坐つていた。片言のように——切れ切れに、お経の文句を覚えていた漁夫が「それでいい、心が通

じる」そう皆に云われて、お経をあげることになった。お経の間、シーンとしていた。誰か鼻をすすり上げている。終りに近くなる
とそれが何人もに殖えて行つた。

お経が終ると、一人々々焼香をした。それから坐を崩して、各々一かたまり、一かたまりになつた。仲間の死んだことから、生きていゝる——然し、よく考えてみればまるで危く生きていゝる自分達のことに、それ等の話になつた。船長と船医が歸つてから、吃どもりの漁夫が線香とローソクの立っている死体の側のテーブルに出て行つた。

「俺はお経は知らない。お経をあげて山田君の霊を慰めてやることは出来ない。然し僕はよく考えて、こう思ふんです。山田君は

どんなに死にたくなかったべか、とな。——イヤ、本当のことを云えば、どんなに殺されたくなかったか、と。確に山田君は殺されたのです」

聞いている者達は、抑えられたように静かになった。

「では、誰が殺したか？——云わなくたって分っているべよ！

僕はお経でもって、山田君の霊を慰めてやることは出来ない。

然し僕等は、山田君を殺したものの仇かたきをとることによつて、とる

ことによつて、山田君を慰めてやる事が出来るのだ。——この

事を、今こそ、山田君の霊に僕等は誓わなければならぬと思う

……」

船員達だった、一番先きに「そうだ」と云つたのは。

蟹の生ツ臭いにおいと人いきれのする「糞壺」の中に線香のかおりが、香水か何かのように、ただよった。九時になると、雑夫が帰って行つた。疲れているので、居睡りをしているものは、石の入つた俵のように、なかなか起き上らなかつた。一寸すると、漁夫達も一人、二人と眠り込んでしまつた。——波が出てきた。船が揺れる度に、ローソクの灯が消えそうに細くなり、又それが明るくなつたりした。死体の顔の上にかけてある白木綿が除れ^とそうに動いた。ずつた。そこだけを見ていると、ゾツとする不気味さを感じた。——サイドに、波が鳴り出した。

次の朝、八時過ぎまで一仕事をしてから、監督のきめた船員と漁夫だけ四人下へ降りて行つた。お経を前の晩の漁夫に読んでも

らつてから、四人の外に、病氣のもの三、四人で、麻袋に死体をつめた。麻袋は新しいものは沢山あつたが、監督は、直ぐ海に投げるものに新らしいものを使うなんてぜいたくだ、と云つてきかなかつた。線香はもう船には用意がなかつた。

「可哀相なもんだ。——これじゃ本当に死にたくなかつたべよ」
なかなか曲らない腕を組合せながら、涙を麻袋の中に落した。

「駄目々々。涙をかけると……」

「何んとかして、函館まで持つて帰られないものかな。……こら、顔をみれ、カムサツカのしやつこい水さ入りたくねえツて云つてるんでないか。——海さ投げられるなんて、頼りねえな……」

「同じ海でもカムサツカだ。冬になれば——九月過ぎれば、船一

艘も居なくなつて、凍つてしまふ海だ。北の北の端はずれの！」

「ん、ん」——泣いていた。「それによ、こうやつて袋に入れるツて云うのに、たった六、七人でな。三、四百人もいるのによ！」

「俺達、死んでからも、碌ろくな目に合わないんだ……」

皆は半日でいいから休みにしてくるよう頼んだが、前日から蟹の大漁で、許されなかつた。「私事と公事を混同するな」

監督にそう云われた。

監督が「糞壺」の天井から顔だけ出して、

「もういいか」ときいた。

仕方がなく彼等は「いい」と云つた。

「じゃ、運ぶんだ」

「んでも、船長さんがその前に弔詞ちやうじを読んでくれることになつてゐるんだよ」

「船長才？ 弔詞イ？ ——」あざ嘲けるように、「馬鹿！ そんな悠ゆう長ちやうなことしてれるか」

悠長なことはしていられなかつた。蟹が甲板に山積みになつて、ゴソゴソ爪で床をならしていた。

そして、どんどん運び出されて、鮭さけか鱒ますの菰こも包づつみのように無雑作に、船尾につけてある発動機に積み込まれた。

「いいか——？」

「よオ——し……」

発動機がバタバタ動き出した。船尾で水が掻かき廻まわされて、アブ

クが立った。

「じゃ……」

「じゃ」

「左様なら」

「淋さびしいけどな——我慢してな」低い声で云っている。

「じゃ、頼んだど！」

本船から、発動機に乗ったものに頼んだ。

「ん、ん、分った」

発動機は沖の方へ離れて行つた。

「じゃ、な！……」

「行つてしまった。」

「麻袋の中で、行くのはイヤだ、イヤだつてしてるようだな……
眼に見えるようだ」

——漁夫が漁から帰ってきた。そして監督の「勝手な」処置を
きいた。それを聞くと、怒る前に、自分が——屍したい体になつた自分
の身体が、底の暗いカムサツカの海に、そういうように蹴けおと落され
でもしたように、ゾツとした。皆はものも云えず、そのままゾロ
ゾロタラップを下りて行つた。「分つた、分つた」口の中でブツ
ブツ云いながら、塩ぬれのドツたりした裨はんてん天を脱いだ。

表には何も出さない。気付かれないように手をゆるめて行く。監督がどんなに思いツ切り怒鳴り散らしても、タタキつけて歩いても、口答えもせず「おとなしく」している。それを一日置きに繰り返す。（初めは、おっかなびつくり、おっかなびつくりでしていたが）——そういうようにして、「サボ」を続けた。水葬のことがあつてから、モットその足並そろが揃つてきた

仕事の高は眼の前で減つて行つた。

中年過ぎた漁夫は、働かされると、一番それが身にこたえるのに、「サボ」にはイヤな顔を見せた。然し内心（！）心配していたことが起らずに、不思議でならなかつたが、かえつて「サボ」が効きいてゆくのをみると、若い漁夫達の云うように、動きかけて

きた。

困ったのは、川崎の船頭だった。彼等は川崎のことでは全責任があり、監督と平漁夫の間に居り、「漁獲高」のことでは、すぐに監督に当って来られた。それで何よりつらかった。結局三分の一だけ「仕方なしに」漁夫の味方をして、後の三分の二は監督の小さい「出店」——その小さい「○」だった。

「それア疲れるさ。工場のようにキチン、キチンと仕事がきまつてるわけには行かないんだ。相手は生き物だ。蟹が人間様に都合よく、時間々々に出てきてはくれないしな。仕方がないんだ」——そつくり監督の蓄音機だった。

こんなことがあった。——糞壺で、寝る前に、何かの話が思い

がけなく色々の方へ移つて行つた。その時ひよいと、船頭が威張つたことを云つてしまった。それは別に威張つたことではないが、「平」漁夫にはムツときた。相手の平漁夫が、そして、少し酔つていた。

「何んだつて？」いきなり怒鳴つた。「手前^{てめ}え、何んだ。あまり威張つたことを云わねえ方がええんだで。漁に出たとき、俺達四、五人でお前えを海の中さタタキ落す位朝飯前だんだ。——それツ切りだべよ。カムサツカだど。お前えがどうやって死んだつて、誰が分るツて！」

そうは云つたものはいない。それをガラガラな大声でどなり立ててしまった。誰も何も云わない。今まで話していた外のことも、

そこでプツつり切れてしまった。

然し、^{しか}こういうようなことは、調子よく跳ね上った空元氣だからげんきけの言葉ではなかった。それは今まで「屈従」しか知らなかった漁夫を、全く思いがけずに背から、とてつもない力で突きめした。突きのめされて、漁夫は初め戸惑いしたようにウロウロした。それが知られずにいた自分の力だ、ということを知らずに。

——そんなことが「俺達に」出来るんだろうか？ 然し成る程出来るんだ。

そう分ると、今度は不思議な魅力になって、反抗的な気持が皆の心に喰い込んで行った。今まで、残酷極まる労働で搾り抜かれしぼていた事が、かえってその為にはこの上ない良い地盤だった。――

—こうなれば、監督も糞もあつたものでない！ 皆愉快がった。一旦この気持をつかむと、不意に、懐中電燈を差しつけられたように、自分達の蛆虫うじむしそのままの生活がアリアリと見えてきた。「威張んな、この野郎」この言葉が皆の間で流行り出した。何かすると「威張んな、この野郎」と云つた。別なことにでも、すぐそれを使った。——威張る野郎は、然し漁夫には一人もいなかった。

それと似たことが一度、二度となくある。その度毎たびに漁夫達は「分つて」行つた。そして、それが重なつてゆくうちに、そんな事で漁夫達の中から何時いつでも表の方へ押し出されてくる、きまつた三、四人が出来てきた。それは誰かが決めたのではなく、本当は

又、きまつたのでもなかつた。ただ、何か起つたり又しななければならなくなつたりすると、その三、四人の意見が皆のと一致したし、それで皆もその通り動くようになった。——学生上りが二人程、吃りどもの漁夫、「威張んな」の漁夫などがそれだった。

学生が鉛筆をなめ、なめ、一晩中腹ば這いになって、紙に何か書いていた。——それは学生の「発案」だった。

発案（責任者の図）

— A

— B

— C

二人の学生」 「雑夫の方一人 国別にして、各々そのうちの餓鬼大将を一人ずつ

吃りの漁夫

—— 水夫の方一人

—— 川崎船の方二人 各川崎船に二人ずつ

—— 水、火夫の諸君

「威張んな」L 「火夫の方一人」

A ↓ B ↓ C ↓ 「全部の」

↑ ↑ ↑ 「諸君」L

学生はどんなもんだいと云った。どんな事がAから起ろうが、Cから起ろうが、電気より早く、ぬかりなく「全体の問題」にすることが出来る、と威張った。それが、そして一通り決められた。

—— 実際は、それはそう容易くは行われなかつたが。

「殺されたくないものは来れ！」——その学生上りの得意の宣傳語だった。毛利もうりもととなり元就の弓矢を折る話や、内務省かのポスターで見たことのある「綱引き」の例をもってきた。「俺達四、五人いれば、船頭の一人位海の中へタタキ落すなんか朝飯前だ。元氣を出すんだ」

「一人と一人じゃ駄目だ。危い。だが、あつちは船長から何からを皆んな入れて十人にならない。ところがこつちは四百人に近い。四百人が一緒になれば、もうこつちのものだ。十人に四百人！相撲になるなら、やってみろ、だ」そして最後に「殺されたくないものは来れ！」だった。——どんな「ボンクラ」でも「飲んだくれ」でも、自分達が半殺しにされるような生活をさせられてい

ることは分っていたし、（現に、眼の前で殺されてしまった仲間のいることも分っている）それに、苦しまぎれにやったチヨコチヨコした「サボ」が案外効き目があったので学生上りや吃りのいうことも、よく聞き入れられた。

一週間程前の大嵐で、発動機船がスクリユウを毀^{こわ}してしまった。それで修繕のために、雑夫長が下船して、四、五人の漁夫と一緒に陸へ行った。帰ってきたとき、若い漁夫がコツソリ日本文字で印刷した「赤化宣伝」のパンフレットやビラを沢山持ってきた。

「日本人が沢山こういうことをやっているよ」と云った。——自分達の賃銀や、労働時間の長さのことや、会社のゴツソリした金^{かね}儲^ねけのことや、ストライキのことなどが書かれているので、皆

は面白がつて、お互に読んだり、ワケを聞き合ったりした。然し、中にはそれに書いてある文句に、かえつて反撥はんぱつを感じて、こんな恐ろしいことなんか「日本人」に出来るか、というものがいた。が、「俺アこれが本当だと思ふんだが」と、ビラを持って学生上りのところへ訊ききに來た漁夫もいた。

「本当だよ。少し話大きいどもな」

「んだつて、こうでもしなかつたら、浅川の性しよツ骨直ぼねるかな」と笑つた。「それに、彼奴等あいつからはモツトひどいめに合わされてるから、これで当り前だべよ！」

漁夫達は、飛んでもないものだ、と云いながら、その「赤化運動」に好奇心を持ち出していた。

嵐の時もそうだが、霧が深くなると、川崎船を呼ぶために、本船では絶え間なしに汽笛を鳴らした。はば巾広い、牛の啼なきごえ声のような汽笛が、水のように濃くこめた霧の中を一時間も二時間もなかった。——然しそれでも、うまく帰って来れない川崎船があった。ところが、そんな時、仕事の苦しさからワザと見当を失った振りをして、カムサツカに漂流したものがあつた。秘密に時々あつた。ロシアの領海内に入って、漁をするようになってから、あらかじ予め陸に見当をつけて置くと、案外容易く、その漂流が出来た。その連中も「赤化」のことを聞いてくるものがあつた。

——何時でも会社は漁夫を雇うのに細心の注意を払つた。募集地の村長さんや、署長さんに頼んで「模範青年」を連れてくる。

労働組合などに関心のない、云いなりになる労働者を選ぶ。「抜
け目なく」万事好都合に！ 然し、蟹工船の「仕事」は、今では
丁度逆に、それ等の労働者を団結——組織させようとしていた。
いくら「抜け目のない」資本家でも、この不思議な行方までには
気付いていなかった。それは、皮肉にも、未組織の労働者、手の
つけられない「飲んだくれ」労働者をワザワザ集めて、団結する
ことを教えてくれているようなものだった。

九

監督は周章^{あわ}て出した。

漁期の過ぎてゆくその毎年の割に比べて、蟹の高はハッキリ減っていた。他の船の様子をきいてみても、昨年よりはもつと成績がいろいろしかった。二千函ぼこは遅れている。——監督は、これではもう今までのように「お釈迦様しゃか」のようにしていたって駄目だ、と思った。

本船は移動することにした。監督は絶えず無線電信を盗みきかせ、他の船の網でもかまわずドンドン上げさせた。二十かいり湮ほど南下して、最初に上げた洩網には、蟹がモリモリと網の目に足をひっかけて、かかっていた。たしかに××丸のものだった。

「君のお陰だ」と、彼は監督らしくなく、局長の肩をたたいた。網を上げているところを見付けられて、発動機ていが放々の態で逃

げてくることもあった。他船の網を手当り次第に上げるようになって、仕事が尻上りに忙しくなった。

仕事を少しでも怠^{なま}けたと見るときには大焼きを入れる。組をなして怠けたものにはカムサツカ体操をさせる。

罰として賃銀棒引き、

函館へ帰ったら、警察に引き渡す。

いやしくも監督に対し、少しの反抗を示すときは銃殺されるものと思うべし。

浅川監督

この大きなビラが工場の降り口に貼はられた。監督は弾をつめツ放しにした。ピストルを始終持つていた。飛んでもない時に、皆の仕事をしている頭の上で、鷗かもめや船の何処どこかに見当をつけて、「示威運動」のように打った。ギョツとする漁夫を見て、ニヤニヤ笑った。それは全く何かの拍子に「本当」に打ち殺されそうな不気味な感じを皆にひらめかした。

水夫、火夫も完全に動員された。勝手に使いまわされた。船長

はそれに対して一言も云えなかつた。船長は「看板」になつてさ
えいれば、それで立派な一役だつた。前にあつたことだつた——
領海内に入つて漁をするために、船を入れるように船長が強要さ
れた。船長は船長としての公の立場から、それを犯すことは出来
ないと頑張がんばつた。

「勝手にしやがれ！」「頼まないや！」と云つて、監督等が自分
達で、船を領海内に転てんび 錨よう さしてしまつた。ところが、それが
露国の監視船に見付けられて、追跡された。そして訊問じんもんになり、
自分がしどろもどろになると、「卑怯ひきよう」にも退却してしまつた。
「そういう一切のことは、船としては勿論もちろん船長がお答えすべき
ですから……」無理矢理に押しつけてしまつた。全く、この看板

は、だから必要だった。それだけでよかった。

そのことがあつてから、船長は船を函館に帰そうと何辺も思つた。が、それをそうさせない力が——資本家の力が、やつぱり船長をつかんでいた。

「この船全体が会社のものなんだ、分つたか！」ウアハハハハハハと、口を三角にゆがめて、背のびするように、無遠慮に大きく笑つた。

——「糞壺」に帰つてくると、吃^{ども}りの漁夫は仰向けにでんぐり返つた。残念で、残念で、たまらなかつた。漁夫達は、彼や学生などの方を気の毒そうに見るが、何も云えない程ぐツしやりつぶされてしまつていた。学生の作つた組織も反古^{ほご}のように、役に立

たなかつた。——それでも学生は割合に元気を保っていた。

「何かあつたら跳ね起きるんだ。その代り、その何かをうまくつかむことだ」と云つた。

「これでも跳ね起きられるかな——威張んなの漁夫だった。

「かな——？ 馬鹿。こつちは人数が多いんだ。恐れることはないさ。それに彼奴等が無茶なことをすればする程、今のうちこそ内へ、内へともっているが、火薬よりも強い不平と不満が皆の心の中に、つまりにいいだけつまっているんだ。——俺はそいつを頼りにしているんだ」

「道具立てはいいな」威張んなは「糞壺」の中をグルグル見廻して、

「そんな奴等がいるかな。どれも、これも……………」

愚痴ッぽく云った。

「俺達から愚痴ッぽかったら——もう、最後だよ」

「見れ、お前えだけだ、元気のええのア。——今度事件起こして
みれ、^{いのち}生命がけだ」

学生は暗い顔をした。「そうさ……」と云った。

監督は手下を連れて、夜三回まわってきた。三、四人固まってる、怒鳴りつけた。それでも、まだ足りなく、秘密に自分の
手下を「糞壺」に寝らせた。

——「鎖」が、ただ、眼に見えないだけの違いだった。皆の足
は歩くときには、^{インチぶと}吋 太の鎖を現実^に後に引きずッているよう

に重かった。

「俺ア、キツト殺されるべよ」

「ん。んでも、どうせ殺されるツて分つたら、その時アやるよ」

芝浦の漁夫が、

「馬鹿！」と、横から怒鳴りつけた。「殺されるツて分つたら？

馬鹿ア、何時だ、それア。——今、殺されているんでねえか。

小刻みによ。彼奴等はな、上手なんだ。ピストルは今にもうつように、何時でも持っているが、なかなかそんなハマはしないんだ。あれア「手」なんだ。——分るか。彼奴等は、俺達を殺せば、自分等の方で損するんだ。目的は——本当の目的は、俺達をウンと働かせて、しめぎ締木にかけて、ギイギイ搾り上げて、しこたま儲ける

ことなんだ。そいつを今俺達は毎日やられてるんだ。——どうだ、この滅茶苦茶は。まるで蚕に食われている桑の葉のように、俺達の身体が殺されているんだ」

「んだな！」

「んだな、も糞もあるもんか」厚い掌てのひらに、煙草の火を転がした。

「ま、待ってくれ、今に、畜生！」

あまり南下して、身体がらの小さい女蟹ばかり多くなったので、場所を北の方へ移動することになった。それで皆は残業をさせられて、少し早目に（久し振りに！）仕事が終わった。

皆が「糞壺」に降りて来た。

「元気ねえな」芝浦だった。

「こら、足ば見てくれや。ガク、ガクツて、段ば降りれなくなつたで」

「気の毒だ。それでもまだ一生懸命働いてやろうツてんだから」

「誰が！——仕方ねんだべよ」

芝浦が笑つた。「殺される時も、仕方がねえか」

「……………」

「まあ、このまま行けば、お前ここ四、五日だな」

相手は拍手に、イヤな顔をして、黄色ツぽくムクンだ片方の頬ほおと眼蓋まぶたをゆがめた。そして、だまって自分の棚たなのところへ行くと、端へ膝ひざから下の足をブラ下げて、関節を掌てがたな刀でたたいた。

——下で、芝浦が手を振りながら、しやべつていた。吃どもりが、

身体をゆすりながら、相槌あいづちを打った。

「……いいか、まア仮りに金持が金を出して作ったから、船があるとしてもいいさ。水夫と火夫がいなかったら動くか。蟹が海の底に何億つているさ。仮りにだ、色々な仕度したくをして、此処まで出掛けてくるのに、金持が金をだせたからとしてもいいさ。俺達が働かなかつたら、一匹の蟹だつて、金持の懐ふところに入つて行くか。いか、俺達がこの一夏ここで働いて、それで一体どの位金が入ってくる。ところが、金持はこの船一艘で純手取り四、五十万円ツて金をせしめるんだ。——さあ、んだら、その金の出所だ。無から有は生ぜじだ。——分かるか。なア、皆んな俺達の力さ。——んだから、そう今にもお陀仏するような不景気な面つらしてるなつて云

うんだ。うんと威張るんだ。底の底のことになれば、うそでない、あつちの方が俺達をおツかながつてるんだ。ビクビクすんな。

水夫と火夫がいなかったら、船は動かないんだ。——労働者が働かねば、ビター一文だつて、金持の懐にや入らないんだ。さつき云つた船を買つたり、道具を用意したり、仕度をする金も、やつぱり他の労働者が血をしぼつて、儲けさせてやつた——俺達からしぼり取つて行きやがった金なんだ。——金持と俺達とは親と子なんだ……」

監督が入つてきた。

皆ドマついたかつこう恰好で、ゴソゴソし出した。

十

空気が硝子ガラスのように冷たくて、塵ちり一本なく澄んでいた。——二時で、もう夜が明けていた。カムサツカカの連峰が金紫色に輝いて、海から二、三寸位の高さで、地平線を南に長く走っていた。小波みが立って、その一つ一つの面が、朝日を一つ一つうけて、夜明けらしく、寒々と光っていた。——それが入り乱れて砕け、入り交れて砕ける。その度にキラキラ、と光った。鷗の啼声どが（何処こにいるのか分らずに）声だけしていた。——さわやかに、寒かっただ。荷物にかけてある、油のにじんだズツクのカヴァアが時々ハタハタとなった。分らないうちに、風が出てきていた。

裨はんでん天の袖に、カガシのように手を通しながら、漁夫が段々を上つてきて、ハツチから首を出した。首を出したまま、はじかれたように叫んだ。

「あ、兎うさぎが飛んでる。——これア大暴風しけになるな」

三角波が立つてきていた。カムサツカの海に慣れている漁夫には、それが直すぐ分る。

「危ねえ、今日休みだべ」

一時間程してからだった。

川崎船を降ろすウインチの下で、其処そこ、此処ここ七、八人ずつ漁夫が固まっていた。川崎船はどれも半降ろしになったまま、途中で揺れていた。肩をゆすりながら海を見て、お互云い合っている。

一寸した。

「やめたやめた！」

「糞くそでも喰くらえ、だ！」

誰かキツカケにそういうのを、皆は待っていたようだった。肩を押し合つて、「おい、引き上げるべ！」と云つた。

「ん」

「ん、ん！」

一人がしかめた眼まなざし差で、ウインチを見上げて、「然しかしな……」
と躊躇ためらつている。

行きかけたのが、自分の片肩をグイとしゃくつて、「死にたかつたら、独ひとりで行えげよ！」と、ハキ出した。

皆は固かたまって歩き出した。誰か「本当にいいかな」と、小声で云っていた。二人程、あやふやに、遅れた。

次のウインチの下にも、漁夫達は立ちどまったままであった。彼等は第二号川崎の連中が、こつちに歩いてくるのを見ると、その意味が分った。四、五人が声をあげて、手を振った。

「やめだ、やめだ！」

「ん、やめだ！」

その二つが合わさると、元気が出てきた。どうしようか分らないでいる遅れた二、三人は、まぶしそうに、こつちを見て、立ち止っていた。皆が第五川崎のところまで、又一緒になった。それ等を見ると、遅れたものはブツブツ云いながら後から、歩き出した。

吃りの漁夫が振りかえつて、大声で呼んだ。「しつかりセツ！」
雪だるまのように、漁夫達のかたまりがコブをつけて、大きく
なつて行つた。皆の前や後を、学生や吃りが行つたり、来たり、
しきりなしに走つていた。「いいか、はぐれないことだど！ 何
よりそれだ。もう、大丈夫だ。もう——！」

煙筒の側に、車座に坐つて、ロープの繕いをやつていた水夫が、
のび上つて、

「どうした。オ——イ？」と怒鳴つた。

皆はその方へ手を振りあげて、ワアーツと叫んだ。上から見下
している水夫達には、それが林のように揺れて見えた。

「よオし、さ、仕事なんてやめるんだ！」

ロープをさっさと片付け始めた。「待つてたんだ！」

そのことが漁夫達の方にも分つた。二度、ワアーツと叫んだ。

「まず糞壺さ引きあげるべ。そうするべ。——非道^{ひで}え奴だ。ちやんと大暴風^{しけ}になること分つていて、それで船を出させるんだからな。——人殺しだべ！」

「あつたら奴に殺されて、たまるけア！」

「今度こそ、覚えてれ！」

殆んど一人も残さないで、糞壺へ引きあげてきた。中には「仕方なしに」随^ついて来たものもいるにはいた。

——皆のドカドカツと入り込んできたのに、薄暗いところに寝ていた病人が、吃驚^{びっくり}して板のような上半身を起した。ワケを話

してやると、見る見る眼に涙をにじませて何度も、何度も頭を振ってうなずいた。

吃りの漁夫と学生が、機関室の縄梯子なわばしごのようなタラップを下りて行った。急いでいたし、慣れていないので、何度も足をすべらして、危く、手で吊つり下さがった。中はボイラーの熱でムンとして、それに暗かった。彼等はすぐ身体中汗まみれになった。汽罐かまの上のストーヴのロストルのような上を渡って、またタラップを下った。下で何か声こわだか高かにしゃべっているのが、ガン、ガ——ンと反響していた。——地下何百尺という地獄のような豎坑たてこうを初めて下りて行くような無気味さを感じた。

「これもつれえ仕事だな」

「んよ、それに又、か、甲板さ引っぱり出されて、か、蟹たたきでも、さ、されたら、たまつたもんでねえさ」

「大丈夫、火夫も俺達の方だ！」

「ん、大丈——夫！」

ボイラーの腹を、タラップでおりていた。

「熱い、熱い、たまんねえな。人間の燻製くんせいが出来そうだ」

「冗談じゃねえど。今火たいいていねえ時で、こんだんだど。燃たいてる時なんて！」

「んか、な。んだべな」

「インド印度の海渡る時ア、三十分交代で、それでヘナヘナになるてんだとよ。ウツカリ文句をぬかした一機が、シャベルで滅多やたら

にたたきのめされて、あげくの果て、ボイラーに燃かれてしまうことがあるんだとよ。——それでもしたくなるべよ！」

「んな……」

汽罐かまの前では、石炭カスが引き出されて、それに水でもかけたらしく、濛もうもう々と灰が立ちのぼっていた。その側で、半分裸の火夫達が、煙草をくわえながら、膝ひざを抱えて話していた。薄暗い中で、それはゴリラがうずくまっているのと、そっくりに見えた。石炭庫の口が半開きになって、ひんやりした真暗な内を、無気味のそに覗かせていた。

「おい」吃りが声をかけた。

「誰だ？」上を見上げた。——それが「誰だ——誰だ、——誰だ」

と三つ位に響きかえつて行く。

そこへ二人が降りて行つた。二人だということが分ると、

「間違つたんでねえか、道を」と、一人が大声をたてた。

「ストライキやつたんだ」

「ストキがどうしたつて？」

「ストキでねえ、ストライキだ」

「やったか！」

「そうか。このまま、どんどん火でもブツ燃^たいて、函館さ歸つたらどうだ。面白いぞ」

吃りは「しめた！」と思つた。

「んで、皆勢揃^{せいぞろ}えしたところで、畜生等にねじ込もうツて云う

んだ」

「やれ、やれ！」

「やれやれじゃねえ。やろう、やろうだ」

学生が口を入れた。

「んか、んか、これア悪かった。——やろうやろう！」火夫が石炭の灰で白くなっている頭をかいた。

皆笑った。

「お前達の方、お前達ですっかり一纏まとめにして貰いたいんだ」

「ん、分った。大丈夫だ。何時でも一つ位え、ブンなぐつてやりてえと思ってる連中ばかりだから」

——火夫の方はそれでよかつた。

雑夫達は全部漁夫のところに連れ込まれた。一時間程するうちに、火夫と水夫も加わってきた。皆甲板に集った。「要求事項」は、吃り、学生、芝浦、威張んなが集つてきめた。それを皆の面前で、彼等につきつけることにした。

監督達は、漁夫等が騒ぎ出したのを知ると——それからちつとも姿を見せなかつた。

「おかしいな」

「これア、おかしい」

「ピストル持ってたつて、こうなったら駄目だよ」

吃りの漁夫が、一寸ちよつと高い処に上つた。皆は手を拍たたいた。

「諸君、とうとう来た！ 長い間、長い間俺達は待つていた。俺

達は半殺しにされながらも、待つていた。今に見ろ、と。しかし、とうとう来た。

「諸君、まず第一に、俺達は力を合わせる事だ。俺達は何があらうと、仲間を裏切らない事だ。これだけさえ、しつかりつかんでいれば、彼奴等如きをモミつぶすは、虫ケラより容易たやすい事だ。——そんならば、第二には何か。諸君、第二にも力を合わせる事だ。落伍者を一人も出さない事だ。一人の裏切者、一人の寝がえり者を出さない事だ。たった一人の寝がえりものは、三百人の命を殺すという事を知らなければならぬ。一人の寝がえり……（「分つた、分つた」「大丈夫だ」「心配しない、やってくれ」）……

「俺達の交渉が彼奴等をタタキのめせるか、その職分を完全につくせるかどうかは、一に諸君の団結の力に依るのだ」

続いて、火夫の代表が立ち、水夫の代表が立った。火夫の代表は、普段一度も云ったこともない言葉をしゃべり出して、自分でどまついてしまった。つまる度たびに赤くなり、ナツパ服の裾すそを引張つてみたり、すり切れた穴のところところに手を入れてみたり、ソワソワした。皆はそれに気付くとデツキを足踏みして笑った。

「……俺アもうやめる。然し、諸君、彼奴等はブンなぐつてしまふべよ！」と云つて、壇を下りた。

ワザと、皆が大げさに拍手した。

「其処だけでよかつたんだ」後で誰かひやかした。それで皆は一

度にワツと笑い出してしまった。

火夫は、夏の真最中に、ボイラーの柄の長いシャベルを使うときよりも、汗をびっしょりかいて、足元さえ頼りなくなっていた。降りて来たとき、「俺何しやべったかな？」と仲間いきいた。

学生が肩をたたいて、「いい、いい」と云つて笑つた。

「お前えだ、悪いのよ。別にいたのによ、俺でなくたって……」

「皆さん、私達は今日の来るのを待っていたんです——壇には一五、六歳の雑夫が立っていた。

「皆さんも知っている、私達の友達がこの工船の中で、どんなに苦しめられ、半殺しにされたか。夜になって薄ッぺらい布団に包まってから、家のことを思い出して、よく私達は泣きました。此

処に集つてゐるどの雑夫にも聞いてみて下さい。一晚だつて泣かない人はいないので。そして又一人だつて、身体に生キズのないものはいないので。もう、こんな事が三日も続けば、キツト死んでしまう人もいます。——ちよつとでも金のある家うちならば、まだ学校に行けて、無邪気に遊んでいれる年頃の私達は、こんなに遠く……（声がかすれる。吃り出す。抑おさえられたように静かになつた）然し、もういいんです。大丈夫です。大人の人に助けて貰つて、私達は憎い憎い、彼奴等に仕返ししてやる事が出来るのです……」

それは嵐のような拍手を惹ひき起した。手を夢中にたたきながら、眼尻を太い指先きで、ソツと拭ぬぐつてゐる中年過ぎた漁夫がいた。

学生や、吃りは、皆の名前をかいた誓約書を廻して、捺印なっいんを貰つて歩いた。

学生二人、吃り、威張んな、芝浦、火夫三名、水夫三名が、「要求条項」と「誓約書」を持って、船長室に出掛けること、その時には表で示威運動をすることが決つた。——陸の場合のように、住所がチリチリバラバラになつていないこと、それに下地が充分にあつたことが、スラスラと運ばせた。ウソのように、スラスラ纏つた。

「おかしいな、何んだつて、あの鬼顔出さないんだべ」

「やつきになつて、得意のピストルでも打つかと思つてたどもな」
三百人は吃りの音頭で、一斉に「ストライキ万歳」を三度叫ん

だ。学生が「監督の野郎、この声聞いて震えてるだろう！」と笑った。——船長室へ押しかけた。

監督は片手にピストルを持ったまま、代表を迎えた。

船長、雑夫長、工場代表……などが、今までたしかに何か相談をしていたらしいことがハッキリ分るそのままの恰好で、迎えた。監督は落付いていた。

入ってゆくと、

「やったな」とニヤニヤ笑った。

外では、三百人が重なり合つて、大声をあげ、ドタ、ドタ足踏みをしていた。監督は「うるさい奴だ！」とひくい声で云った。

が、それ等には気もかけない様子だった代表が興奮して云うのを

一通りきいてから、「要求条項」と、三百人の「誓約書」を形式的にチラチラ見ると、「後悔しないか」と、拍子抜けするほど、ゆっくり云った。

「馬鹿野郎ツ！」吃りがいきなり監督の鼻ツ面を殴りつけるように怒鳴った。

「そうか、いい。——後悔しないんだな」

そう云って、それから一寸調子をかえた。ちよつと「じゃ、聞け。いか。明日の朝にならないうちに、色よい返事をしてやるから」

——だが、云うより早かった、芝浦が監督のピストルをタタキ落すと、拳骨で頬ほおをなぐりつけた。監督がハツと思つて、顔を押えた瞬間、吃りがキノコのような円椅子で横なぐりに足をさらった。

監督の身体はテーブルに引つかかって、他愛なく横倒れになった。その上に四本の足を空にして、テーブルがひっくりかえって行った。

「色よい返事だ？ この野郎、フザけるな！ 生命にかけての問題だんだ！」

芝浦は巾はばの広い肩をけわしく動かした。水夫、火夫、学生が二人をとめた。船長室の窓が凄すごい音を立てて壊こわれた。その瞬間、「殺しちまい！」「打ッ殺せ！」「のせ！ のしちまえ！」外からの叫び声が急に大きくなって、ハッキリ聞えてきた。——何時の間にか、船長や雑夫長や工場代表が室の片隅かたすみの方へ、固まり合って棒杭のようにつつ立っていた。顔の色がなかった。

ドアを壊して、漁夫や、水、火夫が雪崩れなだ込んできた。

昼過ぎから、海は大嵐になった。そして夕方近くになって、だんだん静かになった。

「監督をたたきのめす！」そんなことがどうして出来るもんか、そう思っていた。ところが！ 自分達の「手」でそれをやってのけたのだ。普段おどかし看板にしていたピストルさえ打てなかったではないか。皆はウキウキとはしや噪いでいた。——代表達は頭を集めて、これからの色々な対策を相談した。「色よい返事」が来なかったら、「覚えてろ！」と思つた。

薄暗くなつた頃だった。ハツチの入口で、見張りをしていた漁

夫が、駆逐艦がやってきたのを見た。——周章あわてて「糞壺」に馳かけ込んだ。

「しまったツ!!」学生の一人がバネのようにはね上った。見る見る顔の色が変わった。

「感違いするなよ」吃りが笑い出した。「この、俺達の状態や立場、それに要求などを、士官達に詳しく説明して援助をうけたら、かえってこのストライキは有利に解決がつく。分りきったことだ」
外のものも、「それアそうだ」と同意した。

「我帝国の軍艦だ。俺達国民の味方だろう」

「いや、いや……」学生は手を振った。余程のショックを受けたらしく、唇を震わせている。言葉が吃どもった。

「国民の味方だつて？ ……いやいや……」

「馬鹿な！ —— 国民の味方でない帝国の軍艦、そんな理窟なんてある筈があるか!?」

「駆逐艦が来た！」 「駆逐艦が来た！」 という興奮が学生の言葉を無理矢理にもみ潰してしまった。

皆はドヤドヤと「糞壺」から甲板にかけ上った。そして声を揃えていきなり、「帝国軍艦万歳」を叫んだ。

タラップの昇降口には、顔と手にホータイをした監督や船長と向い合つて、吃り、芝浦、威張んな、学生、水、火夫等が立つた。薄暗いので、ハッキリ分らなかつたが、駆逐艦からは三艘汽艇が出た。それが横付けになつた。一五、六人の水兵が一杯つまつて

いた。それが一度にタラップを上つてきた。

呀あッ！ 着つけけん剣けんをしているではないか！ そして帽子の顎あご紐ひも

をかけている！

「しまった！」 そう心の中で叫んだのは、吃りだった。

次の汽艇からも十五、六人。その次の汽艇からも、やっぱり銃の先きに、着剣した、顎紐をかけた水兵！ それ等は海賊船にでも躍おどり込むように、ドカドカツと上つてくると、漁夫や水、火夫を取り囲んでしまった。

「しまった！ 畜生やりやがったな！」

芝浦も、水、火夫の代表も初めて叫んだ。

「ざま、見やがれ！」 —— 監督だった。ストライキになってから

の、監督の不思議な態度が初めて分った。だが、遅かった。

「有無」を云わせない。「不屈者」「不忠者」「露助の真似する売国奴」そう罵倒ばとうされて、代表の九人が銃剣を擬されたまま、駆逐艦に護送されてしまった。それは皆がワケが分らず、ぼんやり見とれている、その短い間だった。全く、有無を云わせなかつた。——一枚の新聞紙が燃えてしまうのを見ているより、他愛なかつた。

——簡単に「片付いてしまった」

「俺達には、俺達しか、味方が無ねえんだな。始めて分った」

「帝国軍艦だなんて、大きな事を云ったって大金持の手先でねえか、国民の味方？ おかしいや、糞喰らえだ！」

水兵達は万一を考えて、三日船にいた。その間中、上官連は、毎晩サロンで、監督達と一緒に酔払っていた。——「そんなものさ」

いくら漁夫達でも、今度という今度こそ、「誰が敵」であるか、そしてそれ等が（全く意外にも！）どういう風に、お互が繋がり合っているか、ということが身をもつて知らされた。

毎年の例で、漁期が終りそうになると、蟹罐詰の「献上品」を作ることになっていた。然し「乱暴にも」何時でも、別に齋戒沐くよく浴して作るわけでもなかった。その度に、漁夫達は監督をひどい事をするものだ、と思つて来た。——だが、今度は異ちがつてしまつていた。

「俺達の本当の血と肉を搾り上げて作るものだ。フン、さぞうめえこつたる。食ってしまつてから、腹痛でも起きねばいいさ」

皆そんな気持で作つた。

「石ころでも入れておけ！ かまうもんか！」

「俺達には、俺達しか味方が無えんだ」

それは今では、皆の心の底の方へ、底の方へ、と深く入り込んで行つた。——「今に見ろ！」

然し「今に見ろ」を百遍繰りかえして、それが何になるか。——ストライキが惨めに敗れてから、仕事は「畜生、思い知つたか」とばかりに、過酷になつた。それは今までの過酷にもう一つ更に

加えられた監督の復^{ふつきゆうてき}仇的な過酷さだった。限度というものの一番極端を越えていた。——今ではもう仕事は堪え難いところまで行っていた。

「——間違っていた。ああやって、九人なら九人という人間を、表に出すんでなかった。まるで、俺達の急所はここだ、と知らせてやっているようなものではないか。俺達全部は、全部が一緒になったという風にやらなければならなかったのだ。そしたら監督だって、駆逐艦に無電は打てなかったろう。まさか、俺達全部を引き渡してしまうなんて事、出来ないからな。仕事が、出来なくなるもの」

「そうだな」

「そうだよ。今度こそ、このまま仕事していたんじや、俺達本当に殺されるよ。犠牲者を出さないように全部で、一緒にサボルことだ。この前と同じ手で。吃りが云ったでないか、何より力を合わせることで。それに力を合わせたらどんなことが出来たか、ということも分っている筈だ」

「それでも若し駆逐艦を呼んだら、皆で——この時こそ力を合わせて、一人も残らず引渡されよう！ その方がかえって助かるんだ」

「んかも知らない。然し考えてみれば、そんなことになったら、監督が第一周章あわてるよ、会社の手前。代りを函館から取り寄せるのには遅すぎるし、出来高だって問題にならない程少ないし。：

…うまくやったら、これア案外大丈夫だど」

「大丈夫だよ。それに不思議に誰だつて、ビクビクしていないしな。皆、畜生！ ツて氣でいる」

「本当のことを云えば、そんな先きの成算なんて、どうでもいいんだ。——死ぬか、生きるか、だからな」

「ん、もう一回だ！」

そして、彼等は、立ち上った。——もう一度！

附記

この後のことについて、二、三附け加えて置こう。

イ、二度目の、完全な「サボ」は、マンマと成功したということ。「まさか」と思っていた、面喰くった監督は、夢中になって無電室にかけ込んだが、ドアの前で立ち往生してしまったこと、どうしていいか分からなくなつて。

ロ、漁期が終つて、函館へ帰港したとき、「サボ」をやつたりストライキをやつた船は、博光丸だけではなかつたこと。二、三の船から「赤化宣伝」のパンフレットが出たこと。

ハ、それから監督や雑夫長等が、漁期中にストライキの如き不祥事を惹ひき起おこさせ、製品高に多大の影響を与えたという理由のもの

とに、会社があのだ忠実な犬を「無慈悲」に涙銭一文くれず、
 (漁夫達よりも惨めに!) 首を切ってしまったということ。面
 白いことは、「あ——あ、口惜くやしかった! 俺ア今まで、畜生、
 だまされていた!」と、あの監督が叫んだということ。

二、そして、「組織」「闘争」——この初めて知った偉大な経験
 を担になつて、漁夫、年若い雑夫等が、警察の門から色々な労働の
 層へ、それぞれ入り込んで行ったということ。

——この一篇は、「殖民地に於ける資本主義侵入史」の一頁
 である。

青空文庫情報

底本：「蟹工船・党生活者」新潮文庫、新潮社

1953（昭和28）年6月28日発行

1968（昭和43）年5月30日32刷改版

1998（平成10）年1月10日89版

初出：「戦旗」

1929（昭和4）年5月、6月号

※「樺太《からふと》」と「樺太《かばふと》」の混在は、底本通りにしました。

※複数行にかかる波括弧には、罫線素片をあてました。

入力：細見祐司

校正：富田倫生

2004年11月30日作成

2011年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蟹工船

小林多喜二

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>